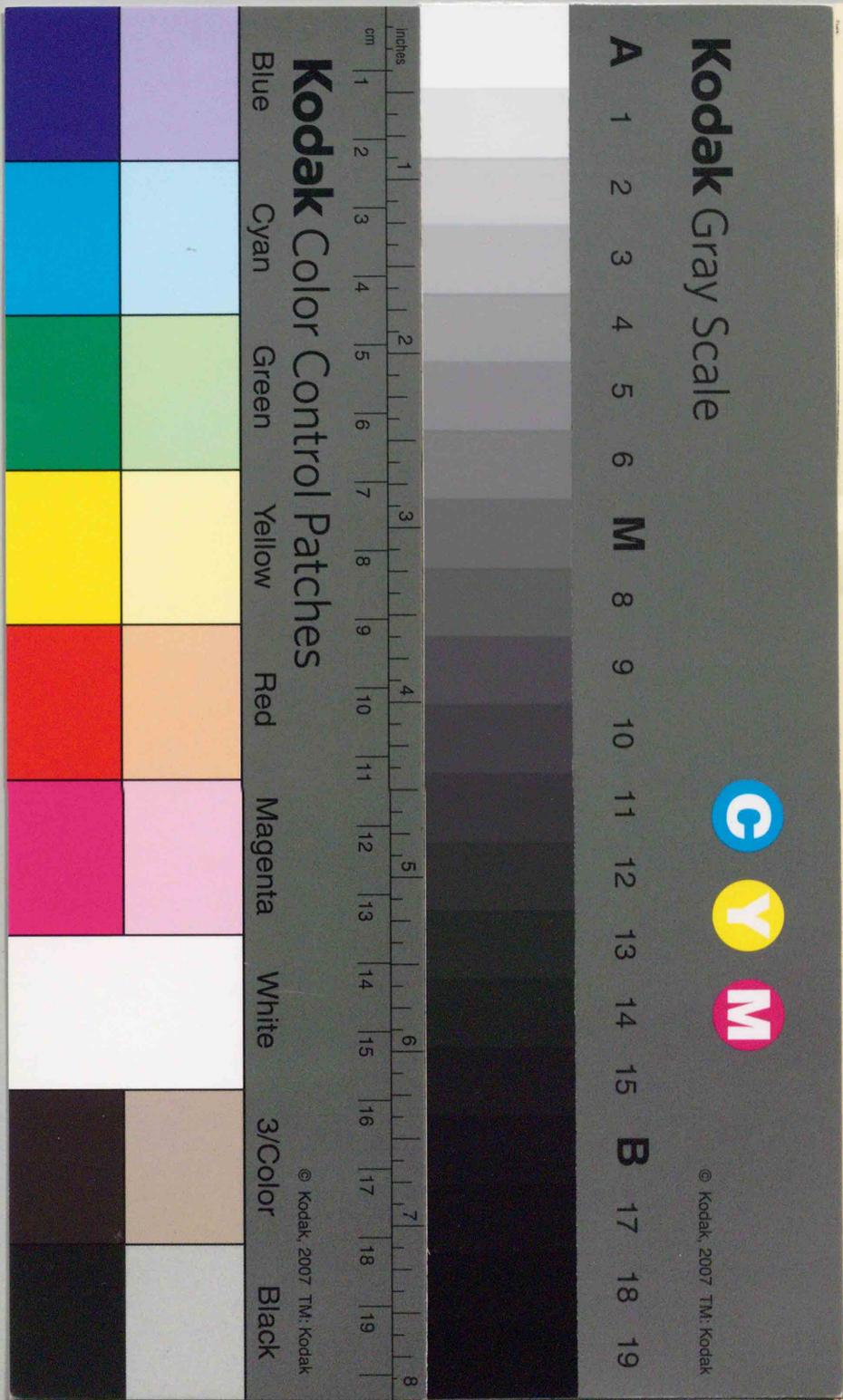


改新帝國讀本

卷十

375.9  
Ha7  
資料室



41559

教科書文庫

4
810
41-1930
200030/565



378.9  
Ha 7

文部省檢定

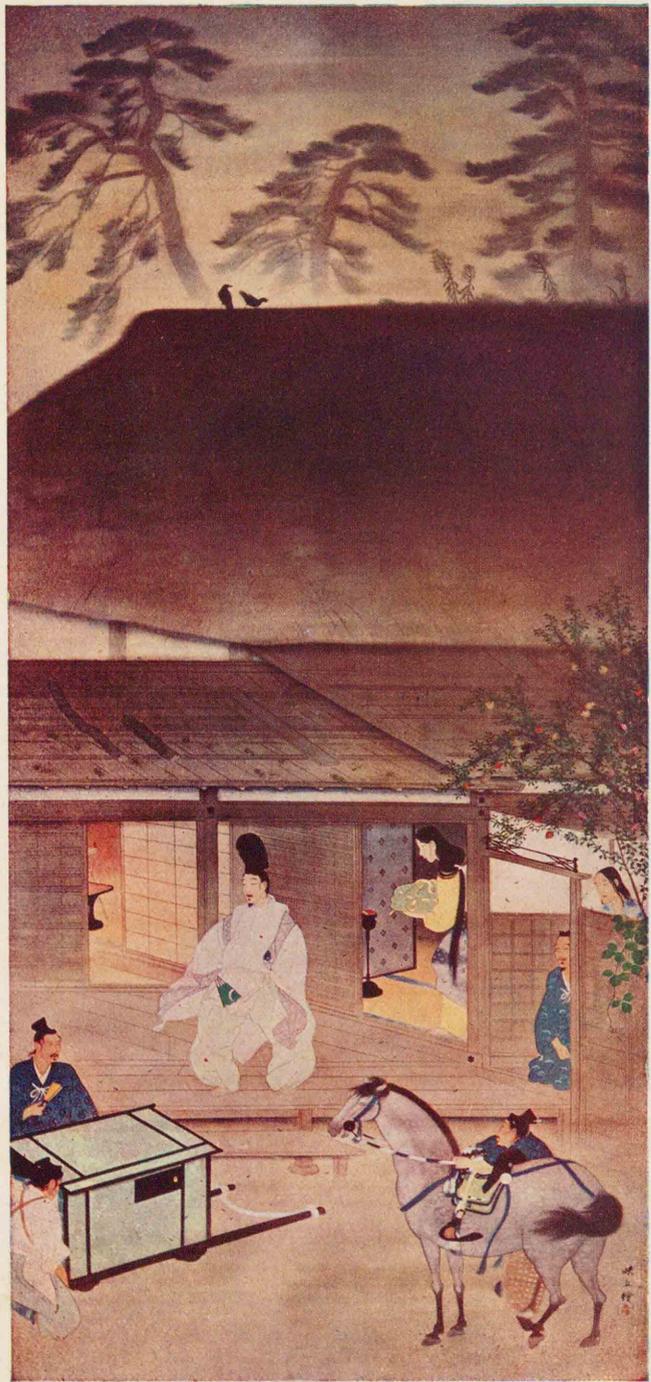
昭和五年二月十四日 中國語科用

# 改新帝國讀本

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年  
文學士 長谷川福平 訂補

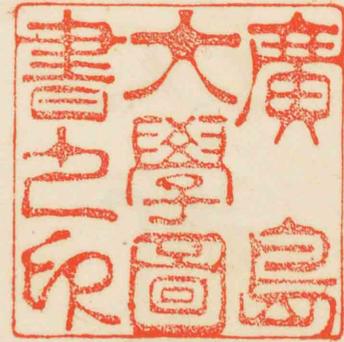
東京

合資  
會社 富山房發兌



池田の宿

松岡映丘筆



# 改新帝國讀本 卷十日次

一	夜なが……………	(俳句新調)……………	一
二	昭和國民の新使命……………	高島米峰……………	五
三	愛國の本義……………	尾崎行雄……………	一一
四	秋のけはひ……………	村田春海……………	一八
五	菊花の約その一……………	上田秋成……………	二一
六	菊花の約その二……………	上田秋成……………	二六
七	詩人杜甫……………	徳富蘇峰……………	三四
八	李 白(自修文)……………	國枝史郎……………	三八
	方丈記その一……………	鳴 長明……………	四七

九	方丈記 <small>その二</small> .....	鳴	長明	五六
一〇	法成寺の造營.....	(榮華物語)		六三
一一	落花の雪.....	(太平記)		六八
一二	萬葉集序説.....	佐々木信綱		七三
一三	萬葉集の歌.....			七九
	民謡の話 <small>(自修文)</small> .....	島木赤彦		八三
一四	舟旅.....	紀貫之		九〇
一五	春は曙.....	清少納言		九七
一六	蟻通の明神.....	清少納言		一〇二
一七	春秋の争.....	津田左右吉		一〇六
一八	古文學に見えた祖先の面影.....	五十嵐力		一一四
一九	現代の文學 <small>その一</small> .....	千葉龜雄		一二〇

二〇	現代の文學 <small>その二</small> .....	千葉龜雄		一二六
----	--------------------------------	------	--	-----



(一)内藤素行。伊豫松山の人。漢詩人でまた日本派を唱えた。正した俳人。大道正十五年歿。年八十。

補陀洛や浪の音信は夏の月  
鳴雪 七十年

(二)名は半次郎。信州の人。宿乞ひし寺の一夜の秋に似し。松一七十一。宇

改新帝國讀本 卷十

一 夜なが

元日や一系の天子富士の山

鳴雪<sup>(一)</sup>



蹟筆雪鳴

氷解けて古藻に動く小海老かな

子規



蹟筆宇松<sup>(二)</sup>

一 夜なが

一

(一)河東兼五郎  
松山市の人。  
明治六年生。  
(二)尾崎徳太郎。  
小説家。明治  
三十六年歿。  
年三十七。

雨來らむと  
して頼にあ  
がる花火哉  
紅葉

(三)角田眞平。  
岡縣の人。靜  
正八年歿。大  
六十四年。

うりもみや  
組板ならす  
女房ふり  
竹冷

(四)ホトトギス派。  
高崎の人。

春風や役者乗せたる葛籠馬  
春雷や家遠く見ゆる野道かな  
五月雨や鴉草踏む水の中  
釣るゝとも見えぬ小舟や行々子

松 宇  
虚 子  
碧 桐  
紅 葉

蹟筆葉紅

炎天の小さきつむじや豆ばたけ  
夕立や金鼓山河を動かして

井 水  
竹 冷

蹟筆冷竹

露涼し形あるものみな生ける

鬼 城

樂書の扇に残る暑さかな  
立秋の大鐘つくや瘦法師

醒 雪  
酒 竹

蹟筆竹酒

一山にひびく魚板や秋ゆふべ  
朝寒の胸ふくらせし雀かな  
野分してけむなぐすみぬ水や空  
落葉ふる音一しきり大伽藍

繞 石  
小 波  
青 々  
紫 影

蹟筆音瓊

水色の空ひらけゆく雪の上

瓊 音

(一)佐々政一。國  
文學者。文學  
博士。京都の  
人。大正六年  
歿。年四十六。  
(二)大野豊大。醫  
學士。東京の  
人。大正二年  
歿。年四十四。  
つはくらや  
三十三間堂  
の雨  
(三)大谷正信。文  
學士。廣島高  
等學校教授。  
松江市の人。  
明治八年生。  
(四)巖谷季雄。小  
説家。お伽作  
家。東京の人。  
明治三年生。  
(五)松瀬彌三郎。  
日本派。大阪  
の人。明治二  
年生。  
青麥や一日  
おきに雨の  
ふる  
瓊 音  
(六)藤井乙男。文  
學博士。京都  
帝國大學名譽  
教授。兵庫縣





啓キ人心惟  
レ同シク風  
視仁ノ化一  
宣同ノ誼ヲ  
同胞ノ誼ヲ  
同シクノ誼ヲ  
モ切ナル最  
皇祖ノ遺訓  
承明ニ遺訓  
ヲ祖考ノ遺  
遺志ヲ繼承  
ル所以存ス  
實カレニ體  
朕意ヲ體ス  
皇考ノ體ス  
考以テ之ヲ  
事以テ之ヲ  
兆無トシテ  
天壤トシテ  
祚ヲ億萬ノ

るの外にはない。即ちこれ建國の精神であり、維新の精神であり、昭和の精神である。

由來日本帝國は家族制度の國がらであつて、國家に於ける國民は、恰も家に於ける家族のやうなものである。隨つて我等國民は、一面に於ては陛下の忠良な臣民であると共に、一面に於ては陛下の可憐な赤子である。義ハ君臣ニシテ情ハ父子。といふのは、日本に於てのみ初めていひ得る尊貴であつて、

國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚すること、全くこの尊貴の賜でなくてはならない。

然るに今や世界に國するもの、その關係次第に親近となり、複雑となり、我の害と他の利と、彼の長と此の短と、互に會通するを要する時である。この際に當り、我が國の國是は、日に進み日に新たなるものでなければならぬこと、もとよりいふまでもない。さりとして、

軫念

急進を是とすることは出来ない。といつて、保守を可とするわけにもゆかない。専ら中庸を執つて、世界人としての日本人の進むべき方向を誤らしめたくないといふ大御心からして、特に

博ク中外ノ史ニ徴シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ。

と仰せになつたのではあるまいか。

最後に、

浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ。

と仰せられたのは、浮華放縱ヲ斥ケ質實剛健ニ趨キとある先帝の遺詔に據らせ給ひしものであつて、更に

模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナ

ル所。

と仰せになつたのは、即ち昭和新政の宣言中の大眼目で、殊にその模擬を戒め創造を勸めよと仰せられたのは、正に國民の頭上に降り給ひし一大警策である。顧れば過去の日本は、餘りに歐米文化の糟粕を嘗めるに急であつて、却つて祖國精神を傷つけるやうなことさへなかつたとはいはれない。いつまでも外國追隨、歐米模倣より脱出し得ないといふのは、斷じて雄邦日本の面目でない。

糟粕を嘗める

光被

識者は既に西洋文明の没落を豫言して、東洋文化の興隆を期待してゐる。我等日本國民はまづこの點に着眼し、昭和の新文化を創造して、以て四海を光被するの大覺悟がなくてはならない。これ即ち昭和國民の新使命であつて、やがて今上陛下の聖旨を奉戴する所以である。

(一)政論家、號は  
罌堂、安政六  
年伊勢國に生  
まれた。

### 三 愛國の本義

(一)尾崎行雄

人は誰でも自國を愛する。愛國心は決して、或國民に限つて存在する專賣特許的の觀念ではない。然るに、日本國民は世界第一の愛國者を以てみづから任じてゐる。私はこの自尊心を重んずる點に於ては敢て人後に落ちないが、たゞその内容實質について日常憂慮に堪へない節がある。次にその一二を記さう。

國家は個人を離れては存在し得ないが、然し、國家は決して一個人の福利増進だけを目的として發生したものではない。國家の使命、目的及び存在の理由は、その地域内に住居する個人個人の生命、財産の安全を保證するばかりでなく、進んで最大多數の最大幸福を増進するのに在る。故に最大多數の最大幸福の爲に必要であるならば、個人の權利、自由もその必要な最少限度に於て拘束される。

即ち各種納税の義務、徴兵の義務、及び國法に従ふの義務などがこれである。この拘束は決してこれに服従する者の幸福を奪ふのではなく、これが爲に却つて一層大なる自由と幸福とが保證されるのである。若し人々がこれに服従することを嫌つて、絶對の無拘束を要求すれば、國家の統制は成立たない。人々は各、生命、財産、その他權利を保證する最高の機關を失ひ、結局僅少の自由を守る爲に最大の自由を失ふことになる。それ故、國家組織の中に在る人民は悉く皆有機的に結合された一個の生活體といふべきである。自分さへよければ他人はどうなつても構はない。否、他人の權利、自由を蹂躪し侵害しなければ、自分の成長、發展が遂げられない。といふやうな考へ方は、眞に自己を愛する所以でなく、却つて自分を殺し他を害する危険思想である。愛國心の場合もほゞこれと同様で、自國の爲にさへなれば他國はどうなつても構はない。否、他國の獨立ま

## 五臟六腑

たは利益を侵害しても、自國の國利、國權を増進するのが愛國心の本義である。といふやうな思想は、決して國家を久遠に繁榮させる眞の愛國心ではなく、却つて國家を危地に陥れる危険思想である。人體内部の主要機關である五臟六腑の病患はいふに及ばず、たとひ指頭に刺さつた小さな棘とげの痛みでさへ、それは決して局部の苦痛だけに止まらず、全身が皆その影響を受ける。かくの如く今日の國家内に於ける人と人、地方と地方との關係はこれと同じである。勞動者がなければ資本家が立たず、農村が疲弊すれば都市もまた衰微する。この有機的關係は一國家内の現象に止まらず、交通が開け文化が進むに隨つて、世界列國は遂に一つの有機的關係に到達すべき運命を有してゐる。現在の國際關係はまた一國家のやうに高等生物的の有機的組織には到達してゐないが、ともかく動物程度の有機的關係にあることは既に明白に看取し得られる。世界

## 有機的關係

大戦以前の國際關係はまだ植物程度の不完全な有機的關係にあつた。それ故、右の枝を切れば左の枝が榮えるやうなこともあり得たが、既に動物程度にまで進んだ今日の國際關係に於ては、右手を切つて左手が太り、甲國が亡んで乙國が榮える譯にはゆかなくなつた。現に戰爭に勝つた聯合諸國は、敗けたドイツをいぢめることによつて各、自國の繁榮を期することの出来ない所以を悟り、今や却つてその復活の爲に援助を與へねばならないやうな、從來の戰爭には見ることに出来なかつた不思議な現象を呈してゐる。これ畢竟今日の國際關係が既に植物的有機體の程度を通過して、動物程度の有機的關係に進んだことの一證左である。

證左  
不退轉

今日以後、國家の久遠の隆盛と、不退轉の繁榮とを希ふ眞面目な愛國者は、この嚴肅な大戦の教訓に深く省る所がなければならぬ。茲に省るところがあれば、恐らく何人でも大戦前の世界に流行

霸道的  
王道的

した侵略主義的愛國心は今後の國家を眞に隆昌に導く所以でないことを悟るであらう。今後の國家繁榮策は從來よりも一層國際協調の精神によつて導かれねばならないことに氣付くであらう。外、大いに國權を伸張し、内、大いに人民の福利を増進することは、勿論國家構成の使命であり目的である。そしてこれを遂げる道は二つある。その一つは霸道的軍國主義で、他の一つは王道的平和主義である。前者は盛んに軍備を擴張し、弱小國を蹂躪して、自國の勢力を伸張する痛快なゆき方で、後者は敢て他を侵さず、正義に據り、人道を踏んで、自然に國の威信を高め、よつて以て國運、民命の伸展を期する地味な流儀である。隨つて前者の外觀の如何にも華々しく勇しいのに較べて、後者は餘りに色彩がなく、動もすれば意氣地なしのやうにも見える。それ故、躍進的國民の人氣は常に前者に集るけれども、歴史の教へる所によれば、眞に國家の隆興、長生をいた

すものは、前者ではなくて後者である。霸道は權道である。時と場合によつては一時權道を執る必要もあらうが、眞の愛國者は常に一日も早く王道に復歸しようとする心掛を持たねばならない。世界大戦前の世界列強は概して軍國主義を奉じてゐた。就中ロシヤとドイツはその代表的國家であつたが、この兩雄は今果して如何の状にあるか。彼等は霸道的國家の眞に果敢ないものであることを語る墓標である。イギリスはやはり霸道を以て國を建てたが、これを守るのに、――まだ理想的でないが、――王道を以てした。これその生命の比較的長い所以である。

文明が進み、國際の交渉が頻繁になり、世界が一つの有機的組織に進んで來れば、自國の發展の爲なら他國を蹂躪してもよいといふやうな我儘勝手が許される筈はない。各國が皆我儘勝手を働いて互に相譲らなければ、茲に大衝突を惹起するのは必至の勢であ

覇道の軍に主を我

王道の平和を我

をとりぬを我

氷輪

社稷

横死

自らの骨折

破綻

る。あの世界大戦はこの帝國主義の當然達すべき歸結であつた。そして、この大戦の慘憺たる試練は、各交戦國民に軍國主義の破綻を痛切に教へた。従前でも、戦争をすれば、多數の人命を損じ、莫大な財産を煙にすることは分つてゐたが、幸に勝ちさへすれば生命と財産の夥しい損失を取返して餘りがある。ほどの精神的及び物質的の代償が得られた。國民の福利は勝利の度毎に著しく増進するかのやうな外觀を呈してゐた。ところが、あの大戦はこの幻影を木葉微塵に吹飛ばし去つた。負けた側の悲惨さはいふに及ばず、勝つた側でも勝利の快感に酔ふのには餘りに手傷が重かつた。今後の戦争は敗けたら亡國、勝つても國民民福が増進せず、その創痕を恢復するのには、戦敗國と同様な苦痛を嘗めねばならないことを、各國ともしみじみと體驗した。この體驗の結果、軍國主義ではいけない、なるべく戦争を避ける手段を講じ、各國が協調してゆくより外に

は、眞に國家を隆盛にし、國民の福利を増進する手段のないことを悟つた。

そこで、戦前に於て世界列強の風潮であつた軍國主義、侵略主義の國策は一變して、國際主義、平和主義の理想が擡頭するやうになつた。我等はこの變化に順應し、進んでこれを指導する意氣込を以て、日本を王道的平和主義の國家にせねばならない。

擡頭

四 秋のけはひ

村田春海

秋のけはひのうつろひゆくまゝに、野面のすまひぞいはんかたなくをかしき。そとの小田の穂なみはかつがつ色づきそめて、まがきのもと（フ）の小萩は、をり得がほにほころびわたれる、露の（フ）にほひ風のおとなひ、いづれあはれを添へざるなんなかりける。さるは、夕月のおもしろきを、たゞにやは過ぐさんとて、蓬生の露うちはらふ

蓬生の露

(一)江戸時代の國學者、文化八年(一七四七)歿。年六十一。六、家集を琴外に歌死、古類抄、和學大綱等の著は有名である。そとも

(二)望山、幽月、猶藏、影、听、砌、飛泉、轉倍、聲、(和漢朗詠集)

なるは、わがたまあへる人々なりけり。伊豫簾高う巻けば、むら雨の名残の雲は、絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゞずまひも、月影にもては、やさされて、やうやうあらはれゆきぬ。山を望めば、かすかなる月。と口づさみ出づれば、をりしも峰飛びこゆる。一つらの聲さだかなるは、このふもと田に落つるなるべし。げに萩のうは露もたゞならずなどいひしらふほどに、一人がいひけらく、霞みていにし雲路の名残なくおぼえしを、秋霧のうへに聲き、そむるが、よにめづらかなることは、さらにもいはじ、すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのぼへ、すぐなる心を動かすつべきくさは、ひ多かる中（フ）に世をうらみては、人の心の秋をかなしみ、うきをなげきては、なかぞらにも、を思ひ、雲水に身をたぐへては、この世をかりとたどるも、をりにふれ、ことにつけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでやこよひのなぐさめに、このくさぐさの

心によそへて、おのおのここのばへ給はんなりとあれば澄みのぼる月影にむかひて、うそぶきいでたるは、心々の引くかたなるべし。世を秋となきて過ぐなる初かりを  
 わが身のよそに聞きやはつべき  
 となんあるは、世をあぢきなく思ふかたあるにや。  
 むねの雲いつかは晴れん初かりの  
 聲もらすべきおもひならねば  
 いかなる人のうへならん。  
 旅衣いくたび秋をかさねまし  
 また初かりのこゑを聞きつゝ、  
 こは故郷をわすれぬ人なれば、  
 かりがねのおくれ先だつ一つらを  
 定めなき世のたぐひとも見ん

口つき

(一)江戸時代の國學者、大阪の人、文化七年(一七四〇年)歿。四十七(一七九〇年)春、兩月物語、春冊子等の著がある。

清貧をあまなふ

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

琴後集

五 菊花の約 その一

上田秋成

青々たる春の柳家園みよのに種うること勿れ。交は輕薄けいはくの人と結ぶこと勿れ。楊柳やうりゆう茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄けいはくの人は交り易くして、去るもまた速なり。楊柳幾たび春に染めども、輕薄けいはくの人は絶えて訪らふ日なし。  
 播磨はりまの國加古の驛はせに丈部左門はせべといふ博士あり、清貧せいひんをあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟母の操そうに譲らず、常に紡績つむぎを事として、左門が志を助けぬ。その季女は同じ里の佐用さよう氏に養はる。この佐用が家は頗る富榮えてありけるが、丈部母子の賢けんきを慕もひ、娘子にょうぢを娶りて親族となり、屢しばしば、事に託せて物を贈ると雖も、口腹くふくの爲ために人を累かさねさんやとて、敢て受くること

なし。

一日左門同じ里の何某が許を訪らひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲いとも哀に聞えければ、主に尋ぬるに、主、西の國の人と見ゆるが、伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見しまゝ、逗めまゐらせしに、その夜邪熱激しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、いづちの人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出でて、心地惑ひぬ。といふ。左門聞きて、悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさることなれど、病苦の人のしるべなき旅の空にこの疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや。といふを、主とゞめて、「病病は人を過つもの」と聞ゆるものから、家童等にも敢てかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。」左門笑うていふ、死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて吾が輩は

起臥も思ふに任せず

死生命あり

漂客

取らず。とて、戸を推して入りつゝ、その人を見るに、主が語りしにたがはで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌は黒く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、湯一つ恵み給へ。といふ。左門近く寄りて、士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひまゐらすべし。とて、主と計りて薬を選び、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、なほ粥をすゝめて病を看ること同胞の如く、誠に捨難き有様なり。かの武士、左門が愛憐の厚きに涙を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。といふ。左門慰めて、力なきことはな聞え給ひそ。およそ疫には日數あり、そのほどを過ぎぬれば壽命を過たず。吾日々に詣でて仕へまゐらすべし。と、實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病やゝ減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞をつくし、左門が陰徳を尊みて、その生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、吾は出雲國松江の郷に人と成りし、赤穴宗右

(一)島根縣能義郡  
今廣瀬町の内。

(二)仁多郡三澤城  
主三澤氏。城  
地は今三澤村  
といふ。  
(三)飯石郡三刀屋  
城主三刀屋氏  
城地は今三刀  
屋一宮の兩  
村に分れた。

衛門といふものなるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としても、の學び給ひぬ。さても吾、近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗留うち、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乗取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡し給へとす。むれども、氏綱は外勇にして内怯なる愚將なれば、果さず、却りて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路にこの疾に罹りて、思ひかけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん。左門いふ、見るところを忍びざるは、人たるものの心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。なほ逗りていたは、はり給へ。といふに、赤穴實ある詞をたよりにて日頃經るまゝに、ものみな平生に近くぞなりにける。

おろおろ

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろおろ語り出でて、とひ辨ふる心愚かならず、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向かひていふ、吾父母に別れまゐらせていとも久し。賢弟が老母はやがて吾が母なれば、新たに拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心を受け給はんや。左門喜に堪へず、母なるもの常に吾が孤獨を憂ふ。信ある詞を告げなば、齡も延びなんに。と、伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて、吾が子不才にて學ぶところ時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く、何の望かこれに過ぐべき。と、喜び嬉しみつゝ、ぞまた日頃を逗りける。

青雲のたより

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散果てて、涼しき風によ

問はでもしる  
し  
わはあひし  
ゆくとあひし

る浪に、問はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向かひて、「吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別を賜へ。」といふ。左門いふ、「さあらば兄長いつの時に歸り給ふべき。赤穴いふ、「月日は逝き易し。遅くともこの秋は過ぎじ。左門いふ、「秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給へ。」赤穴いふ、「重陽の佳節をもて歸りくる日とすべし。」左門いふ、「兄長必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ち奉らん。」と、互に情をつくして、赤穴は西に歸りけり。

六 菊花の約その二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊にほひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつより早く起出でて、草の屋の席を拂ひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒

八雲たつ國

飯の設をす。老母いふ、「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、ここへは百里を隔つと聞く。けふとも定め難きに、その來しを見てものすとも遅からじ。」左門いふ、「赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわたしからんは、思はんことの耻づかし。」とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。

人の心の秋

午時もや、傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心酔へるが如し。老母、左門を呼びて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨に移りゆくとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、またあすの日を待つべし。」とあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消え消えに、氷輪我のみを照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄みわたり、浦波の音ぞここもとにたちくるや

氷輪

うなる。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、たゞ看る、朧なる黑影の中に人ありて、風のまにまにくるを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。躍りあがる心地して、小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟たがへで來り給ふことの嬉しさよ。いざ入らせ給へ。といふめれど、うなづくのみにてものをいはず。左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかじめ、兄長來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、あすこそと、臥所に入らせ給ふ。寤させまゐらせん。といふに、赤穴また頭を振りてとゞめつゝ、更にものをもいはず。左門いふ、既に夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸に一杯を酌みてやすませ給へ。とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、その臭を忌みさくるに似たり。左門いふ、井臼のつとめ、はたもてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふこと勿れ。赤穴なほ答もせで、長き息をつきつゝ、し

井臼のつとめ

ばししていふ、賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ず怪しみ給ひ。吾は現世の人にあらず、きたなき靈の、假に形を見せつるなり。左門大いに驚きて、兄長何故にこの怪しきこと語り出で給ふや。更に夢とも覺えはべらず。赤穴いふ、賢弟と別れて國に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧るものなし。従弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を説きて吾を経久に見えしむ。熟、經久がなすところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。この約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。古の人のいふ、人一日

腹心爪牙

に千里を行くこと能はず、魂能く一日に千里をも行く。」と。この理を  
 思ひ出でて、自ら刃に伏し、今夜陰風に乗りて遙々來り、菊花の約に  
 つく。この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙湧出づるが如し。今は永き  
 別なり。たゞ母公に能く仕へ給へ。」とて、座を起つと見しが、かき消す  
 如く見えなくなりけり。左門あわててとゞめんとすれば、陰風に眼  
 眩みて行方を知らず。俯伏につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて  
 大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に  
 酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に伏倒れたるを、いそ  
 がはしく扶け起して、「いかに。」と問へども、たゞ聲を吞みて泣く泣く  
 更に詞なし。老母問うていふ、伯兄赤穴が約にたがふを怨むとなら  
 ば、あす若し來らば詞なからんものを汝かくまで幼くも愚かなる  
 かな。」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、兄長今夜菊花の約に來  
 る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ、しかじかのやうにて

漿水

まさなし

身を翰墨によ

けふを久しき  
日は浮きたる  
泡の如く且に  
夕べを定め難  
し

約に背くが故に、自ら刃に伏して陰魂百里をくるといひて、見え  
 なりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。たゞたゞ赦し給へ。  
 とさめざめと泣入るを、老母いふ、牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さ  
 るゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝もまたさるたぐ  
 ひにやあらん。能く心を鎮むべし。」とあれども、左門頭を振りて、眞に  
 夢のまさなきにあらず、兄長はここもとにこそありつれ。」と、また聲  
 をあげて泣倒る。老母も今は疑はず、相よびてその夜は泣明かしぬ。  
 あくる日左門母を拜していふ、吾幼より身を翰墨によすと雖も、  
 國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくさず、徒に天地の間に居る。兄  
 長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟けふより出雲に下り、せめて  
 は骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて、暫くの暇を賜ふべ  
 し。老母いふ、吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。  
 永く逗りて、けふを久しき日となすこと勿れ。左門いふ、生は浮きた

る泡の如く、且に夕べを定め難くとも、やがて歸り参るべし。とて、涙を振うて家を出で、佐用氏に行きて、老母の介抱を懇に頼み聞え、出雲の國に参る路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を志れて、まどろめば夢にも泣明かしつゝ、十日を経て富田の大城に至りぬ。まづ赤穴丹治が家に行きて、姓名をもていひ入るゝに丹治迎へ請じて、翼あるものの告ぐるにあらで、いかで知らせ給ふべき謂れなし。と頻りに問ひもとむ。左門いふ、士たるものは富貴消息のこと、ともに論ずべからず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報すとて、日夜を逐うてここに下りしなり。吾が學ぶところについて士に尋ねまゐらすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の床に臥したるに、魏王自ら詣でて、手を執りつゝ、告げけるは、若し忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教を遺せ。とあるに、叔座

社稷

(一)支那秦の政治家。法治を以て秦を富強にした。

いふ、商鞅年少しと雖も奇才あり。王若しこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ。他の國に行かしまれば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、また商鞅を私に招き、吾汝を薦むれども王許さざる色あれば、用ひずば歸りて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし、臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。この事、士と宗右衛門とに比べてはいかに。丹治たゞ頭を低れて詞なし。左門座を進みて、兄長宗右衛門、鹽冶が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽冶を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある限りなり。士が今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、久しき交を思はば、私に商鞅、叔座が信をつくすべきに、たゞ榮利にのみ走りて士家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。さるから兄

横死

家眷

長何故この國に足を逗むべき。吾今信義を重んじて、わざわざここに来る。汝はまた不義の爲に汚名を遺せ。として、いひも終らず拔打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも強ひて追はせざりきとなり。あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

— 雨月物語 —

七 詩人杜甫

德 富 蘇 峰

杜甫は君國的詩人と稱すべきと同時に、また家庭的詩人なりといふを得べし。彼の全集には、事の國家、帝王、時事に關するもの最も多く、これに次いでは家族に關するもの多し。人未だその國を愛して、その家を愛せざるものなく、未だその君に忠にして、その家族に無情なるものあらず。彼の眼中には、國は家の擴大せられたるもの

(一)史學家。思想  
評論家。文名は  
猪一郎。久は  
三年肥後國に  
生まれた。國  
民書、蘇峰文  
餘録、吉田松陰  
選、日本國民  
史等の著があ  
る

にして、家は國の縮小せられたるものなり。彼の忠君愛國は抽象的にあらずして、その妻子弟妹を愛するの情を推及したるものなり。支那の詩人、上は詩經より、下は明清の諸家に至るまで、その家に多少の詩思を接觸せざるものあらず。されど支那の全史を通じて、

未だ彼の如き家庭的詩人を見出す能はざるなり。その「進艇」の作を看よ。

南京久客耕南畝。  
北望傷神坐北牕。



杜甫 (寺崎廣業筆)

(一)支那四川省の  
首府。  
(二)西都の西五里  
なる浣花溪  
(一名浣花潭)  
に在つた杜甫  
の故宅の名

畫引老妻乘小艇。晴看稚子浴清江。  
並蒂芙蓉本自雙。茗飲蔗漿携所便。  
俱飛蛺蝶元相逐。盜賊無謝玉爲缸。  
これ成都に於ける浣花草堂生活の消息なり。その一家和樂の狀

卜居

は、千載のもと、なほ活躍す。夫婦小艇に乘じ、稚子清江に浴す。艇上の  
蛺蝶は俱に飛び、水邊の芙蓉は蒂を並ぶ。先生貧なりと雖も、その樂  
み決して貧ならざるなり。人類ありて以來、詩人多からずとせず。凡  
かも彼が如き清福を嬴得たるもの、それ幾許かある。その江村卜居  
の作中句あり。いはく、老妻畫紙爲碁局。稚子敲針作釣鉤。貧家の活  
計も、ここに至りて寧ろ羨むべきを見るなり。若しそれ彼が「春望」の  
五律の如き、

國破山河在 城春草木深 感時花濺淚 恨別鳥驚心  
烽火連三月 家書抵萬金 白頭搔更短 渾欲不勝簪

(一)杜甫の末子宗武

いかなる鐵石の心腸を有するものも、誦し來りて黯然たらざるは  
あらず。詩としても絶調なり。情としても絶調なり。家書抵萬金の一  
句は、眞に彼の胸奥より湧出でたるなり。同時に「遣興」の詩あり。  
驥子好男兒 前年學語時 問知人客姓 誦得老夫詩

倦々

世亂憐渠小 家貧仰母慈 鹿門携不遂 雁足繫難期  
天地軍塵滿 山河戰角悲 倘歸免相失 見日敢辭遲

彼の心は實にこの稚兒に倦々たりしなり。また、元日示宗武の作に  
いはく、

汝啼吾手戰 吾笑汝身長 處處逢正月 迢迢滯遠方  
飄零還柏酒 衰病只藜床 訓諭青衿子 名慙白首郎  
賦詩猶落筆 獻壽更稱觴 不見江東弟 高歌淚數行

前詩は至徳二載の春、即ち彼が四十五歳の作、後詩は大曆三年の  
正月元日、即ち彼が五十七歳の作なり。僅かに父の詩を誦するを學  
ぶ驥子も、今は一個の青年となりぬ。吾人はこれを讀んで、いかに彼  
がその子に愛着したるかを知るなり。而してまたその同胞に眷々  
たるかを知るなり。  
彼の愛はその妻子のみならず、實に弟妹に及べり。彼の「同谷縣七

(一)唐の肅宗の代の年號、およそ千七百七十餘年前。  
(二)肅宗の次、代宗の代の年號。



硯席  
學問の席。

早速引上げて小姓とした。さうして硯席に侍らした。  
或夜すばらしい山火事があつた。

野火燒山後。人歸火不歸。

縣令は苦心してここまで作つた。が、後を附けることが出来なかつた。

「おい、お前附けて見ろ。」

縣令は李白にかういつた。十歳の李白は聲に應じていつた、

燄隨紅日遠。烟逐暮雲飛。

縣令は苦々しい顔をした。それは自分よりもうまいからであつた。五歳にし

て六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ百家を觀たといふ麒麟兒であつた。田舎

役人の縣知事などが、李白に敵ふべき道理がなかつた。

或日美人の溺死したのがあつた。で縣令は苦吟した、

二八誰家女。飄來倚岸蘆。鳥窺眉上翠。魚弄口傍朱。

すると李白が後を繼いだ、

綠髮隨波散。紅顏逐浪無。何因逢伍相。應是憩秋胡。

(一)天文に關した書物。  
麒麟兒 藝術才能などのすぐれた小兒。

二八 としころの娘

眉上ノ翠 眉上のつやつ

やした黒髮。

口傍ノ朱 口べに。

詩的小人 生はんかに詩

を解するとい

ふやうな愚人

干す 願ひもとめる

倜儻 才氣がすぐれ

て。器量の大き

きこと。

縱横の術 合従連衡の術

豪嘯す 大言ばかりを

口にすること。

(一)崑崙山脈に屬

し甘肅、陝西、

四川の境界を

南東に走つて

ある。

(二)Saint Francis

of Assisi. イタリーの説

教家。フランシ

スコ派の始祖。

(三)道教を奉じて

長生不死の術

などを研究す

また縣令は厭な顔をした。で李白は危険を感じ、事を設けて仕を辭した。

詩的小人といふものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが高ずると、えら

いことをする。李白の逃げたのは利口であつた。

劍を好み諸侯を干して奇書を読み、賦を作る。——十五歳までの彼の生活は、

まづざつとこんなものであつた。

年二十、性倜儻縱横の術を喜び任俠を事とす。これがその時代の彼であつた。

財を輕んじ施を重んじ、産業を事とせず豪嘯す。——こんなやうにも記され

てある。

(二)

或日喧嘩をして數人を斬つた。土地にゐることが出来なかつた。

この頃東巖子といふ仙人が岷山の南に隱棲してゐた。で李白はそこへ走つた。

聖フランシスは野禽を相手に説教をしたといふことであるが、東巖子も小鳥

に説教した。彼は道教の道士であつた。

彼が山中を彷徨つてゐると數百の小鳥が集つて來た。頭に止り肩に止り手に

止り指先に止つた。さうして盛んに鳴きたてた。それへ説教するのであつた。李白はそこへかくまはれることになつた。

或日李白が不思議さうにきいた、

「小鳥に説教がわかりませうか。」

「ばかなことをいふな、わかるものか。あんなにむやみと鳴きたてられては、

第一聲が通りやしない。」

「なぜ集つてくるのでせう。」

「おれが毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞をかけられるのは閉口だ。」

一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で穢らしい飛白かぶりを織るのであつた。

「一體道教の目的はどこにあるのでございませう。」

或時李白がかうきいた。

「つまり、なんだ、幸福さ。」

「幸福を得る方法は。」

道服  
道士の着てゐる服

「長命することと金を溜めることさ。」

洵にあつさりした答であつた。

「どうしたら金が溜りませう。」

「働いて溜めるよりし方がない。」

「その癖、先生はお見受けしたところ、ちつとも働かないぢやありませんか。」

「うん、どうやらそんな恰好だな。」

「働かないで溜める方法は。」

「よくこの次までに考へて置かう。」

一向張合のない挨拶であつた。

「どうしたら長命が出来ませう。」

「いろいろ方法があるらしい。」

「それをお教へ下さいませんか。」

「おれにはわかつてゐないのだよ。」

「物の本で讀みましたところ、内丹説、外丹説いろいろあるやうでございませう。」

(一)道家の金丹である。これを服すると仙人となることが出来るといふ。内丹は自分で身の精氣を煉つた金丹。外丹は指で煉つた金丹。

(一)内外篇八卷。晋の葛洪(號抱朴子)の撰内篇は道家の説のべ、外篇は時事の得失、人事の減否を論じてゐる。

ね。抱朴子などを讀みますと。  
「ほう、う、それではお前の方が學者だ。ひとつおれに話してくれ。」  
李白これには閉口してしまつた。  
或日東巖子が李白にいつた、  
「天とは一體どんなものだらう。」  
「は、あ、これはおれをためす氣だな。」  
すぐに李白はかう思つた。

上帝 天の主宰者。全智全能の神。  
昊天 天の稱。  
皇天 上帝と同じ。  
(二)風の神、雨の神。

「道教の方で申しますと、天は百神の君ださうで、上帝、昊天、皇天などとも、皇天上帝、昊天上帝、維皇上帝、天帝などとも名づけるさうでございしますが、意味は同じだと存じます。天は唯一絶體ですが、その功用は水火木金土、その氣候は春夏秋冬、日月星辰を引連れて、風師雨師を支配するものと私はこんなやうに承つて居ります。」  
「ふうん、大變むづかしいんだな。おれにはそんなやうには思はれないよ。色が蒼くて眞圓で、その端が地の上へ垂れさがつてゐる。こんなやうにしか思

はれないがな。」

これには李白もぎやふんとまゐつた。

「地に就いてはどう思ふな。」

これはあぶないと思ひながらも、眞面目に答へざるを得なかつた。

「地は萬物の母であつて、人畜魚蟲山川草木これに生まれこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日を以て方澤に祭ると、かう書物で讀みました。」

「お前のいふことはむづかしいなあ。おれにはそんなやうには見えないよ。變な色の、變にでこぼこした、穢らしいものにしか見えないがね。」

これにも李白は一言もなかつた。

「お前は人の性をどう思ふね。」

「はい、孔子による時は、『人之生也直。罔之生也。幸而免。』かうあつたやうに思はれます。然し、孟子は性善を唱へ、荀子は性惡を唱へました。だが、告

子は性可能説を唱へ、また楊雄は混合説を唱へましたさうで。」

「だが、そいつは他人の説で、お前の説ではないぢやないか。」

方澤 地上につくつた土の壇である。

(一)論語卷二、雍也第六に出てゐる。

(二)字は況。周代の趙の人。孟子と同時代。その學孔子を尊んだ。

(三)名は不害。孟子の門人。

(四)字は子雲。漢の學者、詩文の家。蜀の成都の人。

(一)有形の學  
(物理學、動物學等)  
(無形の學)  
(哲學、心理學等)  
(哲學、心理學等)  
考へ方  
ら割り出したか

「あつ、さやうでございましたね。」  
「で、お前はどう思ふのだ。」  
「さあ、私にはわかりません。」  
「わかるやうに考へるがいい。」  
「あの、先生にはどう思はれますので。」  
「おれか。おれはな、そんなつまらないことは、考へない方がいいと思ふのさ。」  
「形而上學的思辯といつて、浮世を小うるさくするものだからな。」  
「これには李白は何となく教へられたやうな氣持がした。」  
「まづいものばかり食つてゐると、肉放れがして痩せてしまふ。うまいものを食へ、うまいものを。」  
かういひながら、稗だの、粟だの、黍だのを東巖子は平氣で食ふのであつた。  
「綺麗な衣裳を着るがいい。さうでないとい他人にばかにされる。」  
かういひながら東巖子は一年を通してたつた一枚の道服を着通すのであつた。  
「出世をしるよ、出世をしるよ、いい主人を見つけてな。」

輕快洒脫  
氣持がさつぱりして物ごとくにこなはらな

(一)月刊雜誌。本文は、その第四號に掲載した「岷山の隱士」の一説である。

(二)傳記は詳でないが、久壽元年(西暦一〇七〇年)に生れ、建徳四年(西暦一〇七五年)に死んで六十歳といはれてゐる。著者は、四方丈記の外に四季物語の發心集等がある。うたかた

かういひながら東巖子は、山から出ようとはしないのであつた。  
彼は言行不一致であつた。それが却つてえらかつた。彼は盛に逆理を用ひた。  
李白は次第に感化された。倜儻不羈の精神が、輕快洒脫の精神に變つた。  
或日突然東巖子がいつた、  
「お前は山川をどう思ふな。」  
「山は土の盛上つたもの。川は水の流れるもの。私にはこのやうに思はれます。」  
「さあさあ、お前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい。」——で翌日岷山を出た。  
——大衆文藝——

八 方丈記 その一

鴨長明

一 うたかた  
ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく止ることなし。世の中

棟を並べ墓を争ふ

にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都のうち、棟を並べ墓を争へる、たかきいやしき人のす

まひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれ

ば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて

今年造り、あるは大家亡びて小家となる。

住む人もこれに同じ。所も變らず人も多か

れど、いにしへ見し人は、二三十人がうちに

僅かに一人二人なり。且に死し夕べに生ま

るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

○知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來り

ていづ方へか去る。また知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何

によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を争ひ去る

さま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残り、残れる



(筆涯龍藤伊) 都の敷玉

無常を争ひ去る

と雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露消えず。消えずと雖

も夕べを待つことなし。過去

およそもの心の知れりしよりこの方、四十餘年の春秋を送れ

る間に、世の不思議を見ること、やゝたびたびになりぬ。

二 安元の大火

去にし安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、静かなら

ざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火出で来て、いぬゐに至る。

はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜がほどに

塵灰となり、火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋よ

り出で來けるとなん。吹迷ふ風にとりか、移り行く強風に、扇を廣げ

たるが如く、杉麩になりぬ。遠き家は煙に咽せ、近きあたりはひた

すら、焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映

じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰飛ぶが如く

(一)高倉天皇の御代(一八三七)



業風

(一) 福原遷都

(二) 第五十二代

(三) 高倉天皇

なるも、小さきも、ひとつとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。桁柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて、四五町がほどに置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家のうちの寶敷をつくして空にあがり、檜皮、葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、ものいふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

四 都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都うつりはべりき。いと思の外なりしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時都と定まりにけり。より後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門

庸調

武士の爪が盛とあり  
文官の優美大の爪が  
衰へることを云ふ

よりははじめ奉りて、大臣公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰かひとり故郷に残り居らん。官位に思をかけ、主君のかけをたのむ。むほどの人は、一日なりともとく移らんとはげみあへり。時を失ひ、世におまされて期するところなきものは、愁へながら留りあたり。軒を争ひし人のすまひ、目を經つ、荒れゆく家はこぼたれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人、西南海の所領をのみ願す。東北國の庄園をば好まず。臣内その時自ら事のたよりありて津の國今の京に至れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里を割る

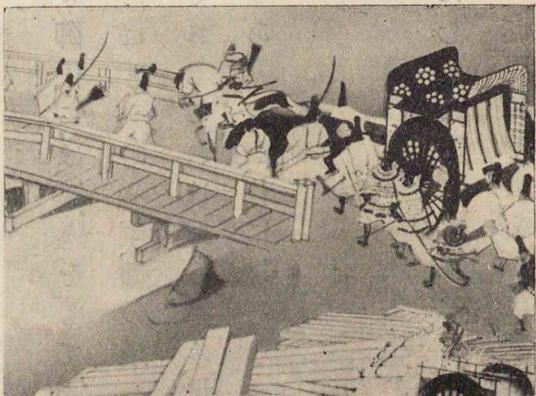


一のそ (筆涯龍藤伊) りつう都

木の丸殿

都の手ぶり

に足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしく、潮風殊に激しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかやと、なかなかやうかはりて、優なる方もはべりき。日々にこぼちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせり。もとよりこの所におたるものは、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひあることを歎く。道のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を着たり。都の手ぶり忽ちに改りて、たゞひなびたる



二のそ (筆涯龍藤伊) りつう都

官殿  
御殿

瑞相

武士に異ならず。これは世の亂る、瑞相とか聞きおけるも、  
 日を経つ、世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空し  
 ちわたりければ、同じ年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されどこぼ  
 ちわたりせりし家どもは、いかにけりけるにか、悉くもとのやうに  
 も作らず。

ほのかに傳へ聞くに、いにしへの賢き御代には、憐みをもて國を  
 治め給ふ。即ち御殿に茅を葺きて、軒をだにと、のへず、煙の乏しき  
 を見給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を惠み、世を  
 たすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔に<sup>なほ</sup>あへて  
 知りぬべし。

五 養和の飢饉

また養和の頃か、とよ久しくなりて、たしかに覺えず、二年が間飢  
 渴して、あさましきことはべりき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大

(一)安徳天皇の御代(一八四一年)

ぞめき

なべてならぬ

さのみやはみ  
さをもつくり  
あへん



(筆涯龍藤伊) 饑 飢 の 和 養

風大水など、よからぬことどもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく  
 春耕し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。  
 これによりて國々の民、あるは地を捨てて  
 境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざ  
 まの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行  
 はるれども更にそのしるしなし。  
 京のならひ、何わざにつけても、源は田舎を  
 こそ頼めるに、絶えて上るものなければ、さの  
 みやは、<sup>みよ</sup>はみさを<sup>も</sup>つくり<sup>あへん</sup>念<sup>が</sup>わ<sup>び</sup>わ<sup>ぶ</sup>す<sup>そ</sup>  
 さまざまの寶物かたはし、<sup>見</sup>た<sup>つ</sup>る<sup>人</sup>も<sup>なし</sup>。たまたま  
 すれども、更に目見<sup>た</sup>つ<sup>る</sup>人も<sup>なし</sup>。たまたま  
 か<sup>ふ</sup>る<sup>もの</sup>は<sup>金</sup>を<sup>軽</sup>くし、<sup>粟</sup>を<sup>重</sup>くす。乞食道  
 のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に満てり。

あまさへ

さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべき  
かと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まざるやうに跡かたなし。  
キカシはますく、のつてさまさまの、のり  
のしほは

九 方丈記 その二

六 わづらひ

ありにくきこ

すべて世のあ姓マキにウキと我が身と住家とのはかなくあだな  
るさまかくの如し。況や所により身のほどに随ひて、心を悩ますこ  
と、擧げて數ふべからず。

すほし

若しおのづから身數ならずして、權門の傍に居るものは、深く悦  
ぶことはあれども、大いに樂しむに能はず。歎ある時も、聲をあげて  
泣くことなし。進退安からず、立居につけて恐れ戦く。例へば、雀の鷹  
の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣に居るもの  
は、朝夕ウツすばき姿を耻ぢて、諛ひつゝ、出で入る。妻子僮僕ウツの羨めるさ

念々に動く

たまゆらも

(一) 住みわびて  
我さへ軒の忍  
草、しのぶか  
たがたしげき  
宿かな(金葉  
集周防内侍)

まを見るにも、富める家の人のないがしウツなる氣色を聞くにも、心  
念々に動きて、時として安からず。若しせばき地に居れば、近く炎上  
する時その害を遁るゝことなし。若し邊地にあれば、往反煩多く、盜  
賊の難はなれ難し。勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは人  
に輕しめらる。實あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を  
頼めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に従  
へば身苦し。また従はねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いか  
なるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべ  
き。

我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁ウツ  
かけ身衰へて、忍ぶ方々ウツしげかりしかば、遂に跡とむることを得ず  
して、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありし  
すまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、は

たづき

かばかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として、軍宿りとせり。雪降り風吹く毎に危からずしもあらず。所は河原近ければ水の難深く、白波の恐も騒がし。

(一)長明が五十歳の春、後鳥羽天皇の承久の頃、

よすが

(二)一名小鹽山。京都府乙訓郡に在る。京都市の西。

(三)土御門天皇建永の頃。

(四)亦猶、行人之造、旅宿、老蠶之成、獨爾、矣。其住幾時、平、(慶滋保胤、池亭記)

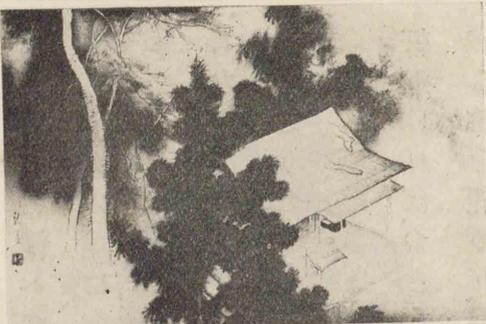
すべてあらぬ世を念を過しつゝ、心を悩ませることは、三十餘年なり。その間をりをりのたがひめは、おのづから短き運をさとりぬ。即ち五十の春を迎へて家を出で、世を背けり。もとより妻子なければ捨難きよすがもなし。身に官祿あらば、何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか経ぬる。

七 閑居

ここに六十の露消え方は及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。

(一)京都府宇治郡木幡山の東北

眉間の光



幽棲 (伊藤龍涯筆)

とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家はをりをりにせばし。その家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎にかけがねをかけたなり。若し心に

適はぬことあらば、易く、外に移さんが爲なり。その改め造る時いくばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

いま日野山の奥に跡を隠して後、南に假の目がくしをさし、いだし、竹の簀子を敷き、その西に閑伽棚を作り、内には西の垣に沿へて、落日を受けて眉間の光とす。の帳

阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受けて眉間の光とす。の帳の扉に普賢並びに不動の像をかけたなり。北の障子の上に小さき棚

のけう  
のた  
のけう  
のた  
のけう  
のた

(一)六卷。源信僧都の著

つかなみ

を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃、往生要集如きの抄物物を入れたり。傍に箏、琵琶のおのおの一張を立つ。所謂折箏、繼琵琶これなり。東に沿へてわらびのほのろを敷き、つかぬを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、ここに文机をいだせり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶる。すすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろもろの薬草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その所のさまをいはば、南に寛あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど、西は晴れたり。観念のたよりなきにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は子規を聞く、調らふ毎に死出の山路を契る。秋は、世のつらさをしるの聲耳に満てり。空蟬の世を悲しむかと、聞ゆ。冬は雪を隣り消ゆるさま

罪障

(一)京都府紀伊郡宇治川の東岸

(二)沙彌滿誓

(三)「溟陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟」白居易「琵琶行」

(四)桂大納言源經信。琵琶の名手。嘉保元年(二七五四年)太宰権帥に貶せられた。都唐風に呼ぶ稱

(五)共に琵琶の名曲

あからさま

罪障に喩へつべし。若し念佛もの憂ぐ、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また耻づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守る。どもはあきらめられども、境界なれば、何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄するあしたには、岡の屋に



行交ふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴らす夕べには、溟陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつ

る。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。大方この所に住み、めし時は、あからさまと思ひしかど、今既に

がうな

五とせを経たり。假の庵もやふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。自然ことの便りに都のさまを聞けば、この山に籠りて後、やんごとなき人の隠れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たびたびの炎上に亡びたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。ほどせばしと雖も夜臥す床あり、晝ある座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。即ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れゝば、願はずまじらはず、たゞ静かなるを望とし、愁なきを樂み、心一なり。心若し安からずば、牛馬七珍もよし。それ三界はたゞ心一なり。心若し安からずば、牛馬七珍もよし。なく、宮殿、樓閣も望なし。今寂しき住居一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを耻づと雖も、歸り

てここに居る時は、他の俗塵に着することをおはれぶ。若し人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとりん。

一〇 法成寺の造營

今は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば、御堂のこと思し急がせ給ふ攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰言宣ふ殿の御前も、このたび生きたるは別事ならず、我が願のかなふべきなめり。と宣はせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心

(一)法成寺。寛仁三年(一〇七三年)創建。道長(藤原道長)の京師御所の東隣。  
(二)藤原頼通。道長の子。世に承保元年(一〇七三年)薨。年八十三。  
(三)藤原道長。

御封



もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、  
 夜もすがらは、山はたゝむべきや、池を掘  
 るべきま、木を栽、なめさせ、さるべき御  
 棟堂御堂、方々さまさま造りつゞけ、御佛はな  
 木べてのさまにやはおはします。丈六の金色  
 の佛を、敷も知らず造りなめ、そなたをば北  
 南と馬道（馬道）をあけて、道をとゝのへ造らせ給  
 ひて、廊渡殿敷多く造らせ給ふに、鶏の鳴く  
 も久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安き  
 いも大とのこもらすたゞこの御堂のこと  
 のみ深く御心にしませ給へり。  
 日々に多くの人々参りまかで立ちこむ。  
 さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御

御莊 地子 官物 賦役

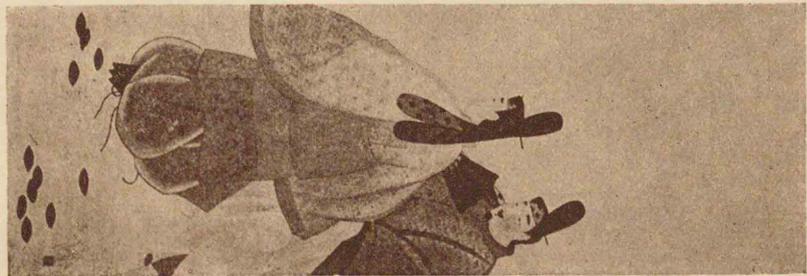


封、御莊どもより、一日に五六百人千人の夫  
 どもを奉るにも、人の數多かることをば、か  
 しこきことに思したち、國々の守ども、地子  
 棟官物（棟官物）はおそなはれども、だゞ今はこの御堂  
 木の夫役、材木、檜皮、瓦など多くまゐらするこ  
 とを、我も我もと競ひつかうまゐる。大方近  
 きも遠きも参りこみて、品々方々、あたりあ  
 たりにつかうまつる。  
 或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛  
 師ども百人許り並みゐてつかうまつる。同  
 じくは、これこそめでたけれと見ゆ。御堂の  
 上を見上ぐれば、工匠どもも二三百人のぼり  
 ゐて、大きな木どもには太き綱をつけて、

御封

聲を合はせて、えさまさと引上げ騒ぐ。御堂の内を見れば、佛の御座  
 作り輝かす。板敷を見れば、どくさ、むくの葉などして、持四五人手毎  
 に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども敷をつくしたり。また  
 年老いたる翁などの、三尺許りの石を、心に任せて切りととのふる  
 もあり。池を掘るとして四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人の  
 ぼりたち、また大路の方を見れば、力車に、ちりえもいはぬ大木どもに綱  
 をつけて、叫びのれり引きもてのぼる。賀茂川の方を見れば、いか  
 だといふものにくれ、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひの、  
 しりてもてのぼるめり。磐石といふばかりの石を、はかなきいかだ  
 に載せて率てくれど沈まず。すべていろいろさまざまいひつくし、  
 まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造り、けんも、かく  
 やありけんを見ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごととなり、  
 かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとけ勝らせ給へ

(一)釋迦在世時代  
 の富豪。蘇達  
 多ともいふ



御堂關白 松岡映丘筆

(一)眞言宗豊山派  
の本山、奈良  
縣磯城郡初瀬  
にある。

(二)四天王寺の略  
稱。聖德太子  
の創建。天台  
宗。大阪。市。天  
王寺區にある。

り見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近  
う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜みまゐらす。今はこの  
御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざ  
まに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものをもて運  
ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて参ると見ゆ。なほなべてこの世  
のことは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺(一)にある僧の、御祈ごん  
禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき男の出で來  
て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興  
隆の爲に生まれ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。また天王寺の  
聖德太子の御日記には、王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。と  
こそは書置かせ給ふなれ。いづれにても、疎オウツカかならぬ御事なり。

—榮華物語—

Wise men will care not at all hours,  
and will speak five times  
from their taste of humor to one from  
their reason.

their reason.

- (一) 近江より朝  
たの野にばう  
鶴そなくなる  
明けぬこの夜  
は(古今集)  
大歌所の歌
- (二) 白露も時雨  
もいたく守山  
けり(古今集)  
集、紀貫之
- (三) 滋賀縣蒲生郡  
安土村の東南
- (四) 「うちわたす  
今や汐干にな  
よるみ舟とを  
通はす」常磐井  
木集
- (五) 愛知縣愛知郡  
今江の西方に在  
崎の南寺稱星

- (一) またや見  
交野のみ野の  
さくら狩花  
の雪(新古今  
集、藤原俊成)
- (二) 大阪府北河内  
郡
- (三) 朝まだき嵐  
の山のさむけ  
れば紅葉の  
錦(拾遺集、  
藤原公任)
- (四) 滋賀縣滋賀郡  
に在る
- (五) 一貫物たえず  
の勢多の東路  
橋音もとる  
平(風雅集、  
兼盛)

一 落花の雪



の長橋うち渡り、行交ふ人にあふみ路や、世  
のうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀  
なり、時雨もいたく守山の、木の下露に袖濡  
れて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過行  
けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え  
わかず、ものを思へば夜の間にも、老蘇の森  
の下草に、駒を止めて顧る、故郷を雲や隔つ  
らん。  
番場、醒が井、柏原、不破の關屋は、荒れはて  
て、なほもるものは、秋の雨の、いつか我が身  
のを、はりなる、熱田の、八つるぎ、伏拜み、汐干  
に、今や、鳴海瀉傾く、月に、道見えて、明けぬ暮  
れぬと、行く道の、末は、いづくと、遠江、濱名の

一 落花の雪



一 落花の雪

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩紅葉  
の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあ  
かすほどだにも、旅寝となればもの憂きに、  
恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行  
方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし  
九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅  
に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。  
憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡  
れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見わ  
たせば、潮ならぬ海に、こがれ行く身をうき  
舟のうき沈み、駒もとどろと踏鳴らす、勢多

捨小舟

(一)静岡縣天龍川の東岸に在る古は西岸に在つた。  
(二)安徳天皇の御年代(一八四四年)

いばゆ  
(三)静岡縣榛原郡金谷と日坂の間の坂嶺の昔東海道の往還であつた。

(四)一年たけてまおたこゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山(新古今集)西行法師  
亭午

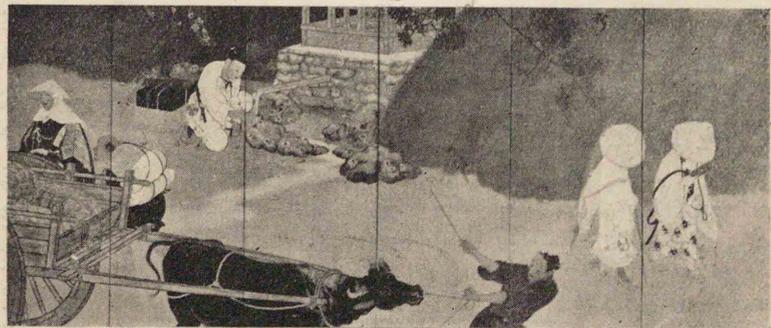
橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元暦元年の頃か、とよ重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この宿に着き給ひにし、その古の哀までも、思ひ残さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に、いばえて、天龍川をうち渡り、小夜

の中山越えゆけば、白雲道を埋み來て、そことも知れぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけり、と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日既に亭午にのぼれ



(筆雲紅藤伊) 水 清 の 關

(一)静岡縣榛原郡  
(二)仲恭天皇の承久三年(一八八一年)

(三)京都府葛野郡嵯峨に在る今の天龍寺  
龍頭鷓首

ば、かれひまゐらするほどとて、輿を庭前にかき止むながえをたいて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔、南陽縣、菊水。

汲下流、而延齡。

今、東海道、菊川。

宿、西岸、而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀やいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの

おなじながれに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛、龍頭鷓首の舟に乗り、詩歌管絃の宴にはべりしことも、今は二たび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

(一) 靜岡縣志太郡  
 (二) 歸りくるほ  
 朝露の、岡邊  
 の眞葛うら枯  
 れにけり。藤  
 原爲家  
 (三) 駿河なる宇  
 津の山べの夢  
 つにも人にあは  
 ぬなりけり。  
 (伊勢物語)  
 (四) 駒とめて過  
 ぎぞやられぬ  
 清見潟、ちり  
 しく花や波の  
 關守。(風雅  
 集、法橋顯昭  
 (五) 富士の嶺の  
 煙はなほぞ立  
 ちのぼる。上  
 なきものはお  
 もひなりけり。  
 (新古今集、藤  
 原家隆)  
 (六) こゆるぎの  
 いそたちなら  
 めさしめらす  
 な沖に居れ波  
 (古今集、相模  
 歌)  
 (七) 元弘元年。

島田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、  
 宇都の山べを越えゆけば、蔦、楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將  
 のすみかを求むとて、東の方へ下るとて、夢にも人にあはぬなりけ  
 り。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。  
 清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いと  
 ど涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原うち過ぎて、富士の  
 高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、あくる  
 霞に松見えて、浮島が原を過行けば、潮干や淺き舟浮きて、おりたつ  
 田子のみづからもうき世をめぐる車がへし、竹の下道行惱む、足柄  
 山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐと  
 しもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこ  
 そ着き給ひけれ。

——太平記——

(一) 歌人。文學博  
 士。明治五年  
 三重縣に生ま  
 れた。著書、日  
 本歌學史、萬  
 葉集論、萬葉  
 集選釋等。萬  
 葉集校本、萬  
 葉集の編纂集  
 なつたものて  
 ある。  
 基調

(二) 三十卷。梁の  
 蕭統撰。文章  
 詩賦を蒐めた  
 もの。  
 (三) 二十一卷。漢  
 の淮南王劉安  
 の撰。

(四) 奈良朝時代の  
 武將で歌人の  
 聖武、孝謙の  
 兩帝に仕へ、  
 延暦三年(一  
 四四四年)薨。

### 一一 萬葉集序説

佐々木信綱

原本

古來、歌集は多いけれども、その想の純眞、簡素の中に人心の基調  
 を傳へて、さながら歌の故郷ともいふべく、詩歌の不朽の生命の源  
 泉をなせるものは萬葉集である。

萬葉集といふ名の起りについては、「萬の世」といふ説と、「萬の言の  
 葉」といふ説と二つある。いづれも當時流行した文選、淮南子等の漢  
 籍中の文字に出たものとされる。兩説とも道理があつて、いづれを  
 正しいとも定め兼ねる。然し今傳つてある二十卷の雜然たる歌集  
 の名稱としては、萬代に傳へるといふ意を寓した萬世に解するよ  
 りは、萬の言の葉をあつめた集と解しておく方が、吾人に適當な感  
 じを與へる。  
 これを撰んだのは、大伴家持で、しかも私撰、且つ草稿の儘に傳つ

たもので、未だ十分整理をしないのである。然し草稿の儘で精選してないといふことが、歌集であるだけに、少しの障もないのみならず、却つて當時のいろいろの歌風が窺はれて面白いのである。萬葉集が精選を経ずに傳つたのは、寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も半ば整ひ、半ば整つて居らぬ。

施類歌

五七七

又七七

卷數二十卷、卷々の歌數は素より一定せず、分類は（雜歌）（相聞）（挽歌） （男女、親子、兄弟） （哀傷、譬喩、四季等）の目であつて、それを更に年代によつて順序するの（此は）が撰者の意志であつたらしい。然しかゝる標準の明らかにまもられてゐるのは小部分に過ぎぬ。

歌體からいへば長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、（セドウカ）旋頭歌六十一首となる。長歌、旋頭歌がかく多くあるのは、この歌集の特色である。

時代は奈良朝、更に詳しくは藤原朝、持統、文武……二十三年間、奈良朝

(一)第十六代。  
(二)第十九代。  
(三)第二十一代。

良朝(元明以後淳仁に至る——四十八年間合計約七十一年間を代表し、集中の歌、概ねその間の作で、しかも短い藤原朝の間の作は、長い奈良朝の間の歌に比して數が多いやうに思はれる。然し一々の歌については、持続以前の作もかなり有り、最も古くは仁徳、(一)允恭、(二)雄略天皇時代の作もある。

作者はその名の知られたものと知られないものと相半ばし、知られたものについて見るに、上は帝王、皇后、皇族、大官より、下は庶人、乞食等にわたるあらゆる階級の人を含んでゐる。これまた後代の勅撰集に見ぬこの集の特色である。

そのうたはれた題材から見ると、地理的に言へば、北海道を除いて殆ど日本全國にわたつてゐる。大和を初め、近畿を中心として、東海、東山、西海、北陸、南海、山陽、山陰諸道の諸國の地名、風土はすべてうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸、魚介、草木の類から器材、服食に

至る迄すべて取扱はれてゐる。これだけでも萬葉集の歌が當時の人々の日常生活のすべてと交渉してゐたことがわかる。それで後世の歌に見るやうな特別の歌題というものが未だなかつたので、その歌はいづれも當時の人々の實際の経験と交渉してゐる。要するに歌と言へば、特殊の人士が、花鳥風月の風流とか、名所とか、また一定の題目とかによつて、想を構へたものとなつてしまつた後世の狭い題詠とはまるで違つてゐる。それだけに歌として見て、到底後の歌に見得べからざる面白味がある。

次に萬葉集の奈良朝文明に於ける位置について考へて見よう。抑、奈良朝といふのは、今更いふまでもなく、我が國の文明史上黄金時代もとよりその文明は専ら帝都に限られてゐて、範圍の狭いものであつたがであつた。而して丁度現今の我が國が、歐米諸國の文明を採入れて立派な發達をしてゐるやうに、當時はその頃隆盛

の域にあつた支那の文明を採入れて光彩まばゆい有様を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文明が、後代に遺した殆ど不滅の事業として、萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文明が進歩した後代、もしくは今後に於ても、永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるか。即ち當時の美術と文學とである。而して文學とは即ちこの萬葉集の歌である。

奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を忍ばしめるところの幾多の建築物、彫刻物を觀た人は、我等の祖先が、上世に有した立派な文明にまのあたり接して、我々の祖先が、上世に有した立派な文明にまのあたり接して、一種、神往の感に打たれたざるを得ぬであらう。而してかの藥師寺の建築、彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸像等が出來たと同時に、萬葉集が生まれたのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて

神往の感

敦厚

實に奈良朝文明は創り出されたのである。しかも更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それぞれ奈良朝文明について有する位置と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼等美術家たちが、國民中の少數者たる天才であり、しかも多くは三韓、支那の歸化人もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふことである。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時の我が日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、即ち國民性てふものを、血と肉とに於て感ずるところが出来るのである。しかも或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふことに於て、我が上代人の國民性は歴史上大いに貴しとすべきものであつた。このことは、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て萬葉集は實にかの諸美術品にもまして一層

貴重なる人間的創作たるを得るのである。萬葉集を有するは實に我等國民の誇である。

一三 萬葉集の歌

(一)第四十代天武天皇  
(二)鎌足  
(三)天武天皇の妃

(一) 天皇詔内大臣藤原朝臣競隣春山萬花之艶  
(二) 秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌

冬ごもり、春さきりくれば、なかさりし鳥も來鳴  
 きぬ、さかさざりし花も咲けれど、山をしみ入り  
 その中、草深みとりても見す、秋山の木の  
 葉を見ては、もみづをば取りてどしぬぶ、青き  
 をば置きてぞ歎く、  
 大君の枕、吉野宮に幸ませる時、  
 安見ししわが大君、神ながら神さびせすと、吉  
 安之天下を見てし、天皇は神、

一三 萬葉集の歌

其の神はふるまひをし給ふこと

國見

野川瀧つ河内に、高殿を高知り、  
 ち國見をすれは、  
 奉る御調と、春は花かざし持ち、  
 葉かざせり。夕川の神も又、大御食に任へまつる、  
 と、上つ瀬に瀧、  
 たし、山川もよりて仕ふる神の御代か。

反歌

山川もよりてつかふる神ながら  
 たぎつ河内に船出せすかも

望不盡山歌

天地のわかれし時ゆ、  
 なる富士の高嶺を、  
 たる日の影もかくろひ、  
 神さびて高く貴き、  
 天の原ふり、  
 照る月の光も見えず、

山々部 赤人

駿河

白雲もい行きは、  
 語りつぎいひつぎ行かん、

時じくど雪はふりける。

富士の高嶺は。

反歌

田子の浦、  
 うち出でて見れば真白にぞ

ふじの高嶺に雪はふりける

山上憶良

思子等歌

瓜はめば子ども思ほゆ。  
 いづくより来りしものぞ、  
 りて、安寝しなきぬ。  
 粟はめばましてしぬばゆ。  
 まなかひは、

反歌

白金も黄金も玉もなにせんに

まさされる寶子にしかめども

柿本人麿

(一)奈良時代の歌  
 人。天平五年  
 (二)三九三年  
 歿、年七十四

まなかひ



理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐるといふことは、決して不自然ではない。

このことは勅撰集時代のその背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂歌などに現れてゐる民謡を調べて観れば、容易に頷くことが出来るのである。

笛分けば袖こそ破れめ利根川の、石は踏むともいざ河原より。

しながどり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ、舟かたぶくな、

若草の妹も乗りたり、我も乗りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以つて、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そしてこの民謡の系統は、足利、徳川の各時代を経て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

然らばそれ等の民謡の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産みだした、惻々として人の心を動かす力をもつ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子が籠

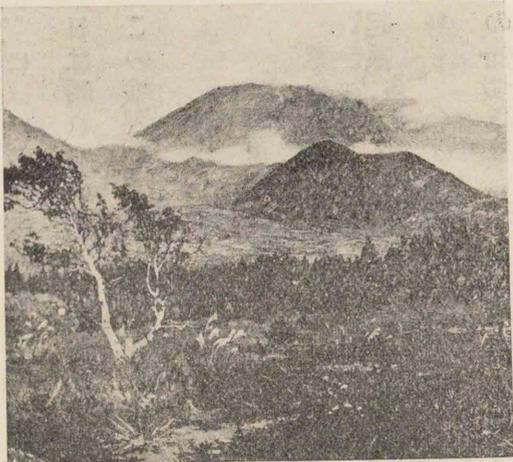
神樂歌  
神樂に和して  
歌ふ歌  
催馬樂歌  
雅樂の初  
め奈良時代の  
民謡で馬方の  
歌つたもので  
あるが、平安  
朝以後歌曲と  
したのである  
しながどり  
(息長島)かい  
つぶりのこと  
猪名の枕詞。  
(一)静岡縣濱名郡  
西濱名村の邊  
若草の  
妹の枕詞。

惻々  
心のかなしみ  
いたむさま。

(一)大島の西北端。

(二)長野縣北佐久郡にある町。善光寺道との分岐點であつた。

(三)群馬縣碓氷郡にある町。碓氷峠の東麓。  
(四)東山道を経て江戸から京都へ行く街道



淺間の煙(瀨野覺藏筆)

人の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹さを味はふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、  
今宵泊らにや雨になる。

つてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣瀨ない哀音が籠つてゐる。  
乳が崎沖まぢや見送りまじよが、それから先は神だのみ。(伊豆大島)  
の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼りなく住む人  
一誦して淺間の山裾から碓氷越をして、  
北國街道を往來する馬子の唄であることが  
わかるではないか。淺間の裾野には追分の  
宿場があり碓氷峠の下には坂本の宿驛があ  
つて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場  
であつた。その宿引の女が旅人を呼びとめて一宿を勧める心がこの歌の心で  
ある。一夜の宿を勧める歌謡を勧められる旅人や馬子がみづから唄つて、自分

の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空にはいつも淺間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けばあすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」はこの嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ。九つのまめを見れば、

親里がこひしや。

麥をつくは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとど落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をつく。夜麥について掌に出来たまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐らく人麿、貫之の秀歌にも勝るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が叙べられてゐる。そしてその民謡としての生命も、全くその中にあるのである。かゝる職業的個性の心理や感情を現す民謡ほど、それがまた地方的の個性を

情調  
心持

表現してゐるといひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くとも土の個性を離れることは出来ない。その土地のもつ情調がその土に住む生活から唄はれた民謡に強い影を投ずることは誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生まれ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舎に生まれてゐることを考へ合はせると、民謡と地方との關係をほゞ推測することが出来る。たゞ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。然しながら、よし轉訛したとしてもその唄も土と人とを離れて行はれぬからその轉訛に自ら地方的個性が現れてくる。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、大麥ついて、麥ついて、お手にまみよ九つ。九つのまみよ見れば、

親の在所こひしよ。

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

(一)賀茂郡。下田町の近傍。

この苗をとりあげて、どこに棲ますや。いなごや。きりすゝき  
すき葦の、こやのうらに棲ますや。

これは伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふにこの歌謡は、決して近代のものではない。少くとも平安時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子をもつが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心情をもつた民謡が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つた薄や、結きあんだ葦の小屋の中に、自分と共に住まないか。」といふその心は、何といふ單純な、同情のこもつた、愛に満ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞動をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心をもつ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて」であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地

方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して、三の坂越しや強清水。

これは信濃國の民謡中、出色の一である。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を



八ヶ嶽 (中田頼璋筆)

上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上る中に汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たく

しみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。そして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謡の中にも現れてゐるのである。

一四 舟 旅

紀 貫 之

別 離

九日つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これ  
 かれ互に國の境のうちはとて見送りにくる人あまたがなかに藤  
 原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、こ  
 かしこに追ひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き  
 志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く、こ  
 れを見送らんとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕行くまにま  
 に、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸に  
 もいふことあるべし、舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこ  
 の歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども

(一)平安朝初期の歌人。天慶九年(一六〇)六月、新撰和歌集の撰者。古  
 今集の撰者。承平五年(一一五五)正月二十一日、高知縣出發。  
 (二)同縣長岡郡と香美郡との間の港。今は不詳。  
 (三)同縣安藝郡に在る。今は奈半利村といつてゐる。  
 (四)泊をおふ

(一)香美郡の赤岡

うれ

思へらす

(二)安藝郡室津・今羽根村

ふみしなれば知らずやあるらん

かくて宇多の松原を行過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るにたへずし、舟人のよめる歌、

宇多の松原、舟人のよめる歌、  
 見渡せば松のうれごとにしむ鶴は

ちよのどちとぞ思ふべらなる  
 とや。この歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ漕行くまにまに、山も海もみな暮れ、坂ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、帆取の心にまかせつ。男もならはぬ、はいとも心細く、女はふなごに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子、帆取はふなうた歌ひて、何とも思へらす。

海 路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくし

(一)室津の三四里  
東南にさし出  
た岬

て、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風浪ともに止  
むべくもあらず。或人のこの浪たつを見てよめる歌、

南海 霜だにも置かぬかたぞといふなれど  
なみの中には

雪が降りける

さて舟に乗りし

紀日よりけふまでに、

貫二十日餘り五日に

之なりにけり。

十七日曇れる雲



曉月夜

(二)棹穿波底月  
缸壓水中天。  
(買島)

なくなりて、曉月夜あけづきよいとおもしろければ、舟を出して過行く。この間  
に雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔の男は、  
棹はうがつ波の上の月を

舟はおそふ海の中の天を

とはいひけん聞きさしに聞けるなり。或人のよめる、  
水底の月の上より漕ぐふねのこぐふねのさをはるは桂なるべし

これを聞きて或人のまたよめる、  
かげ見れば波の底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明行くに、襪取等黒き雲にはかに出で  
來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてんといひてかへる。この間に雨  
降りぬいとわびし。

都がへり

(一)十一日雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方に山  
の横ほれるを見て人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞きて喜び

て、人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。ここに相應寺

(二)二月十一日  
横ほる

(三)男山八幡宮

(四)京都府乙訓郡  
大山崎村

とかく定むることあり

の邊に暫し舟をとめて、とかく定むることあり。この寺の岸の邊に柳多くあり。或人この柳の影の川の底に映れるを見てよめる歌、

のさざれ浪よするあやをば青柳の  
かげのいととして織るかどぞ見る

(一)乙訓郡石塔寺の南あるじす

十六日。けふの夕つ方京へのぼるついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、<sup>舟の影の</sup>法螺の形もかばひざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必ずしもあつまるまじきわざなり立ちて行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

(二)世の中は何が常なる飛鳥川、さきのふは瀬になる。古今集よみ人しらす

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。といひて、或人のよめる歌、  
ひさかたの月におひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつる桂川

そでをひでても渡りぬるかな

また或人のよめる、

かつら川わがこゝろにも通はねど  
おなじ深さにながるべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれれば、所々も見えず。京に入立ちて嬉し。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。さればたよりごとくに、物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にもものもいは

志はせん

せざいとほつらく見ゆれど志をばせんとす。  
 さて池めいて窪まり水づける所ありほとりに松もありき。五年  
 六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひた  
 るぞまじれる。大方皆荒れにたれば、哀とぞ人々いふ。思ひ出でぬこ  
 となく思ひこひしきがうちに、この家にて生まれし女子も、もろと  
 もに歸らねば、いかかは悲しき。舟人も皆子抱きての、しる。かゝる  
 うちになほ悲みに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、  
 うまれしもかへらぬものを我が宿に

小松のあるを見るが悲しさ。  
 とぞいへる。なほあかすやあらんまたなん。  
 みし人を松のちとせに見ましかば、  
 遠くかなしきわかれせましや  
 忘れ難く、口惜しきこと多かれど、えづきさす。  
 清少ト納言

—土佐日記—

(一)平安朝時代の  
女流文學者  
清原文輔の女  
一條天皇の女  
定子に仕へた。

一五 春は曙

清少ト納言

一四 四季

春は曙やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる  
 雲の細くたなびきたる。  
 夏は夜月の頃はさらなり、闇もなほ、螢とびちがひたる。雨などの  
 降るさへをかし。  
 秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥の  
 ねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛行くさへあはれなり。ま  
 いて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入り  
 はてて、風の音蟲の音などいとあはれなり。  
 冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず、霜などのい  
 と白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわた

つとめて

るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわるし。

二 ふるものは

雪霰ユキアザみぞれみぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、またいと多うは降らぬが、瓦の目毎めづめに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをかし。時雨霰は板屋霜も板屋庭。

三 雲は

白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆくもいとをかし。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

四 あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒この

いちごくひたる。

五 木の花は

梅は濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて、咲きたる、藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭に隠るらんと思ふにいとをかし。祭まつりの歸るさに紫野むらさきのわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

四月の晦、五月つぎの朔つひなどの頃ほひ、橘たちばなの濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

(一)京都府愛宕郡大徳寺邊の舊名  
おどろ



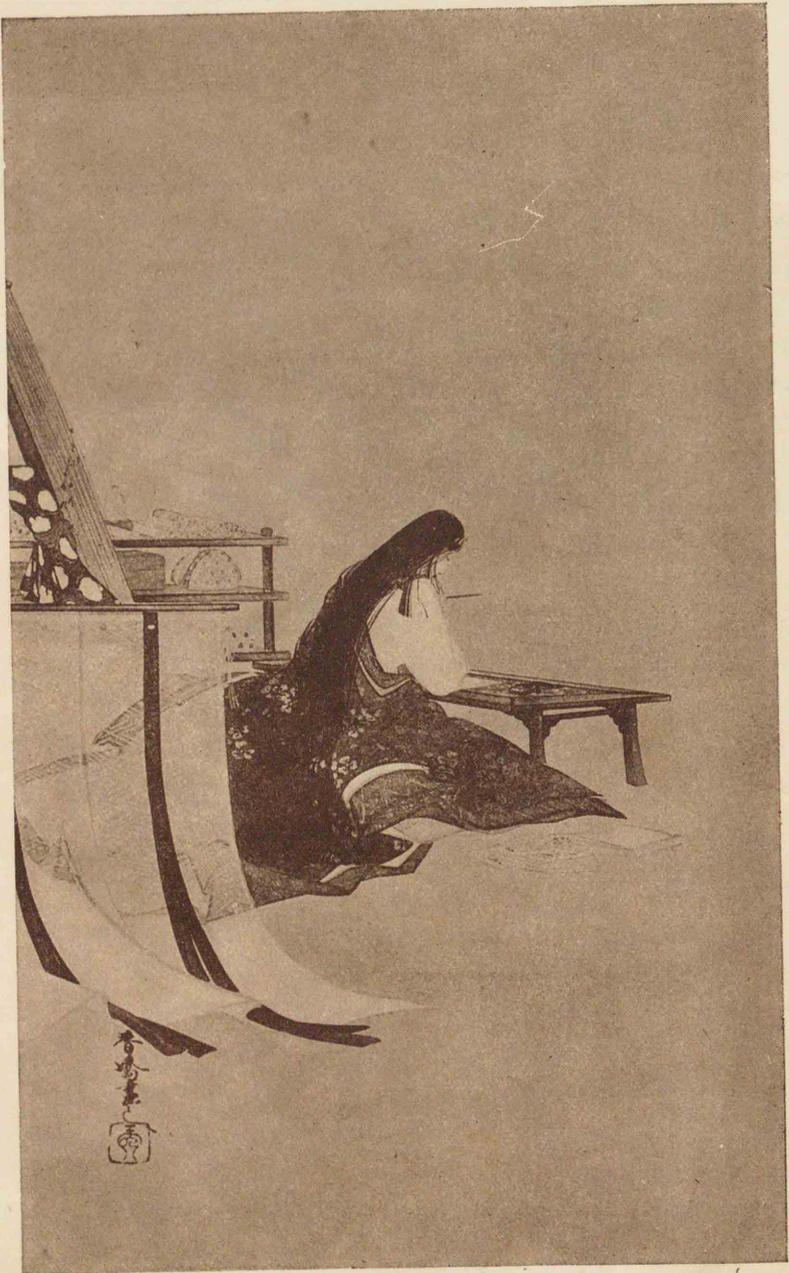
一六 蟻通の明神

清少納言

(一)大阪府泉南郡長瀬村  
(二)「かきくもりあやめもしらぬ大ぞらに、ありどほしをば思ふべしや帖」(古今六)

蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌詠みて奉りけんに、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、たゞ若き人をのみ思し召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ、他の國の遠きに行きかくれなどして、更に都のうちにはさるものなかりけるに、中將なりける人の、世の覺めでたく、心なども賢かりけるが、七十近き親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしとおぢ騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一たび見では、えあるまじとて、密に夜々家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、行きつゝ見る。おほやけにも人にもうせ隠れたる由を知らせてあり。世に立ちま

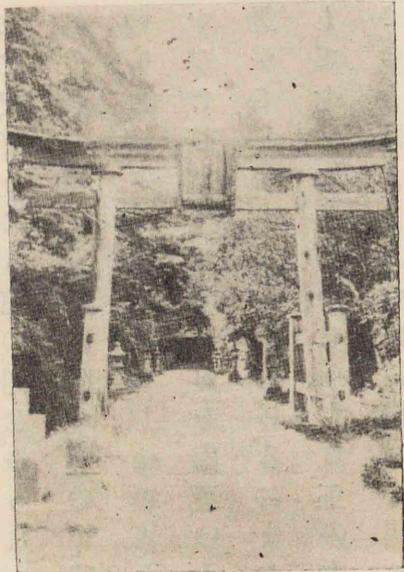
清女作草紙



谷口香嶺筆

オウツノ

じらはんをこそ嫌ひ給はめ、家に入りおたらん人をば、知らでもお  
はせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、  
いと心賢く、萬づのこと知りたりければ、この中将若けれど才あり、



神 明 通 蟻

「これが本末いづかたぞ。」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうな  
ければ、帝思し召し煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、かう  
かうのことなんあるといへば、たゞはやからん川に、たちながら横  
いたり賢くして、めでたしと  
思すなりけり。唐土の帝、この  
國の帝をいかで謀りて、この  
國討取らんとて、常に試み、争  
事をして送り給ひけるに、つ  
やつやとまるに美しげに削  
りたる木の二尺許りあるを、

すはえ

ざまに投入れ見んに、かへりて流れん方を、末と記して遣せ。と教ふ。  
 参りて我しり顔にして、試みはべらん。とて、人々具して投入れたる  
 に、さきにして行く方に印をつけて遣したれば、げにさなりけり。ま  
 た二尺許りなる蛇の同じやうなるを、これはいづれか雄雌。とて奉  
 れり。また更に人え知らず。例の中將行きて問へば、二つを並べて、尾  
 の方に細きすはえをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ。と  
 いひければ、やがてそれを内裏のうちにてさしければ、げに一つは  
 動かさず、一つは動かしけるに、また印つけて遣しけり。ほど久しう  
 して七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小  
 さきを奉りて、これに緒通して賜はらん、この國に皆しはべること  
 なり。とて奉りたるに、いみじきものの上手もえしはべらず。そこら  
 の上達部より始めて、ありとある人知らずといふに、また行きて、か  
 くなんといへば、大きな蟻を二つ捕へて、腰に細き絲をつけ、また

それに今少し太きをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ。といひ  
 ければ、さ申して蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、げにいと疾  
 う穴のあなた口に出でにけり。さてその絲の貫かれたるを遣した  
 りける後になん、なほ日本は賢かりけりとて、後々はさることもせ  
 ざりけり。この中將をいみじき人に思し召して、何事をし、いかなる  
 位をか賜はるべき。と仰せられければ、更に官位をも賜はらじ。たゞ  
 老いたる父母の隠れ失せてはべるを尋ねて、都に住ますることを  
 許させ給へ。と申しければ、いみじう易きこと。とて許されにければ、  
 萬づの人の親これを聞きて、喜ぶこといみじかりけり。中將は大臣  
 までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神になりたるに  
 やあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れて宣ひける、  
 七わだにまがれる玉の緒をぬきて  
 ありどほしとも知らずやあるらん

と宣ひけると、人の語りし。

—枕ノ草子—

### 一七 春秋の争

津田左右吉

(一)文學博士。早稲田大學教授。岐阜縣の人。現「文學」の研究者。國民思想の名著である。

18  
13  
1

自然界は、平安時代の人にとつては、人世の歡樂を助けるものとしてのみ價值があつたのである。換言すれば、彼等は自然界を以て人の翫弄すべきものと考へてゐた。奈良時代の人は、單純な小兒らしい態度で自然の美しい色と聲とを愛し、或は自然を我が氣分に融合させたのであつた。然るに平安時代の貴族にとつては、花も鳥も彼等に翫弄される爲に、咲きもし鳴きもしなければならぬのであつた。だから花も月も人の見る爲のものときめて置いて、花を散らす風には吹くなと命じ、月を隠す雲には去れよといひ、傲慢な態度で自然を驅使しようとする。さて翫弄されるものは、小さいもの、美しいものである。現に、<sup>(二)</sup>何も何も小さきものはいと美し。『枕ノ草子』と

(二)「うつくしきもの」の條。

いつてゐる。雄大、傀偉、森嚴、凡そその威力の人を壓し、その活動の人を恐れさせるものは、もとより翫弄すべきものでない。自然界に於て優美な羸弱な方面のみを愛するといふことは、奈良時代の人から既にさうであつたが、平安時代になると、貴族等の氣風が益、羸弱になると共に、それが一層甚しくなつたばかりでなく、かういふ特殊な理由も加つてゐる。

特に狹隘で、優美で、且つ小規模である平安京の山水を天地として、それより外には出ることを好まなかつた當時の都人士は、山川の遊覽を興あるものとした奈良時代の人とは違つて、平素見馴れてゐる小さい美しい自然界と少しでも様子の變つた光景に接すると、殆どその前に戰慄するばかりであつた。枕ノ草子開卷第一に、春は曙と書出した一節を見るがよい。すべてが小さく美しく優しいではないか。怖しきものに「つるばみの笠やけたる所。みづぶき。菱。髪

枕ノ草子

多かる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが「のみを擧げたのを見ると、怖しいものさへ、小さいものばかりであるのに驚かれる。古今集以下の撰集を見ても、家集を讀んでも、その題材となつてゐるのは、花鳥の色と音とでなければ、美しい月の影、優しい蟲の聲々である。萬葉に見えるほどの山水の眺も、殆どなくなつてしまつた。その歌が春秋に多くして夏冬に少いのも、美しく優しい眺が春秋に多いからである。和泉式部に「世の中は春と秋とになしはてて、夏と冬とのなからましかば」といふ歌がある。夏ならば「階のもと(一)の薔薇けしきばかり咲きて、春秋の花盛よりもしめやかにをかしき」源氏眺か、冬ならば「雪高(二)う降りて今もなほ降るに、五位も四位も、色麗しう若やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを着て、あこめ(三)の紅ならずば、おどろおどろしき山吹を出して、からかさ(四)をさしたる「枕草子」美しさをのみ賞した。野分(五)でさへも、源氏の野分の巻や、

(一)和泉式部集卷二。  
(二)源氏物語賢木の巻。

(三)「雪高う降り」の條。

枕の「野分のまたの日こそ」の一節を見ると、凄じいより寧ろ美しい。平安時代の人は、何ものについても、優美な點をのみ見出してゐる。ここに春秋の争といふことがある。これは萬葉から既に見えてゐること、かの額田王の歌には秋を選んでゐる。平安時代になつては、伊勢物語に

雁なきて菊の花さく秋はあれど

はるの海べにすみよしの濱

の歌があるが、選擇の主意が明らかに説いてない。貫之は

春秋(一)に思ひ亂れてわきかねつ

ときにつけつゝうつる心は

と、どちらにも都合のよいことをいつてゐる。承香殿(二)のとし子の

おほかたの秋に心をよせしかど

花見るときはいづれともなし

(一)藤原千兼の妻宇多天皇の女御藤原胤子(醍醐天皇の御母)に宮仕へしてゐた。  
(二)拾遺集雜の部。

(三)拾遺集雜の部。

〔拾遺集雜の部〕

もほゞ同様で、一應は秋に心を寄せたといふものの、その理由が明らかでない。たゞよみ人しらずの

春はたゞ花の一重にさくばかり

ものあはれは秋ぞまされる

に至つて、ものあはれの一轉語を下して、秋に旗を擧げた。あはれといふからには、春よりも秋に人の心が動かされることが深いといふのであらうが、それは何故であらうか。源氏の薄雲の卷にその主人公が、

年の内、ゆきはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆくこともはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛をなん、昔よりとりどりに人争ひはべりける。その頃のげにと心よるばかりあらはなる定め、あはれはべらなれ、唐土には、春の花の錦に如くものなしといひはべるめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取立て

目移る

て思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りて、はつきりてえこそ花鳥の色をも音をも辨へはべらね。狭き垣根の内なりとも、そのをりをりの心見知るばかり春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘移して、いたづらなる野邊の蟲をも住ませて、人に御覽せさせんと思ひ給ふる。

といった語がある。これにも春秋をいづれとも判断してゐないが、「秋のあはれ」の成語を引いてゐるのに、秋草の色と蟲の音とを考へてゐることを注意しなければならぬ。春を飾る花鳥の色と音とに對して、秋の特殊な情趣を示すこの風物が、ものあはれを一入深く感じさせるものだとするれば、かの歌に、春より秋を選んだのは、爛漫たる櫻の花の華やかなよりは、寧ろ萩やをみなへしのひたすらに優しく、小さく、女らしい弱々しさのあるのに、心が引かれたのであらう。春の花の一重に咲くばかりとして、それよりも秋を取つた

のだから、千草の花の種々なのが、一層美しい故とも解せられるが、その千草の色には、春の花に求められない優しさと弱々しさとがあるのである。さうして、ここに平安時代の人の嗜好が現れてゐるのではなからうか。同じく秋を取つても、華やかな紅葉を手折らうとする額田王とは、理由の違ふところが看取される。

さて美しい小さい眺を愛する自然の傾向として、観察は頗る細かくなつた。桃の木若枝の多くさし出たのを、<sup>(一)</sup>片つ方は青く、いま片つ方は濃く艶やかにて、<sup>(二)</sup>蘇枋のやうに見えたる。<sup>(三)</sup>枕草子といひ、いはてぬる山際に、光のなほとまりて明う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる。<sup>(四)</sup>同上といひ、明離るゝほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆく。<sup>(五)</sup>同上といふなども色の観察、またはおほとなぶらまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる鈎のきはやかなるも、け

(一)正月十日の條。

(二)日はの條。

(三)雲はの條。

(四)心にくきもの條。

(一)ある所にの條。

(二)宇津保物語。二十卷。源氏物語よりも前に出た小説作者未詳。

(三)春日詣の條。

ざやかに見ゆ。<sup>(一)</sup>同上といひ、<sup>(二)</sup>あり明の月のありつゝも、<sup>(三)</sup>とうちいひてさしのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光。<sup>(四)</sup>同上といふ光線の描寫などの精緻な筆つきを見るがよい。細かい點をいふと、蚊の羽風さへ清女の筆のぼつてゐる。これ等は宇津保に<sup>(五)</sup>且の霞、緑の衣なり。夕べの雲、黄なる錦なり。などとある漢文直譯流のものとは違つて、深切な實際の觀察から來たものである。源氏の風景の描寫は枕ほど繊細ではないが、その代り、いかにも生きてゐる。よくその風韻を寫し、全體としての情趣を髣髴せしめる手腕は、また格別であるといつてよい。ただ清少納言は紫式部のやうに人情の微を穿つ眼がなかつただけ、目に見えるものの觀察は甚だ鋭敏である。それはこの女一個人の特長ではあるものの、やはり時代の生んだものであることはいふまでもない。

—文學に現はれたる國民思想の研究—

### 一八 古文學に見えた祖先の面影

(一) 日本書紀、日本書紀といふのは、弘仁以後、一般にいはれてゐる。延喜五年藤原忠平の撰進した朝廷の恒例の行事や作法の儀式作法を記したものである。

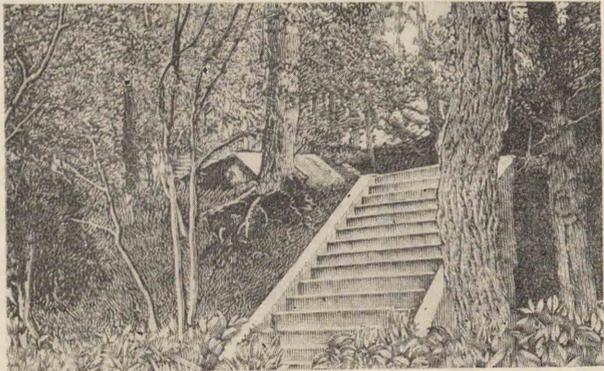
奈良時代以前のおもな文學は、古事記、日本紀の中に在る百八十餘首の歌と、延喜式の中に在る祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、その中最も文學的價値のあるものは、大祓詞と祈年祭詞とであらう。祝詞を見ると、我が國民が罪穢を忌み、清く直きを愛したこと、神を敬ひ平和を愛したことがわかる。

古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの 全けん人は、 たゝみこも 平群の山の  
くまがしが葉を、 うずに挿せ、 その子。

これは尊が伊勢の能褒野で薨り給はんとする時、遙かに故郷の大和を思ひやつて歌はれた思國歌である。歌の大意は、我は今病の

爲に、旅の空に寂しくはてるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ故郷の命全く身の健かならん人よ、



日本武尊能褒野陵

むかし我が汝等と共に取つてかざして遊んだあの平群の山のくまがしの葉を髮飾として、楽しく遊べよかし。我が愛する故郷人よ。といふことであらう。

旅路に悩み、死に臨んで故郷をしのぶのは人情の自然で、珍しくもないが、毒氣にあたり、恐しい苦悶を重ねて死ぬる間に、遙かなる故郷人に語を寄す。命全けん人は、平群のくまがしをかざし、陽氣に遊んで人生を楽しめかし。といはれた御心持はどうであらう。この樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい

氣象は、いかにも有難いものではないか。日本武尊はいろいろな點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君をつかみひしいで、こもりに包んで投捨てるといふ亂暴をされるが、それでゐて、君父の命には従ふといふ優しいところがあつた。東西の兇賊を手もなく平げられる武勇があつて、それで姿はといふと、女装すれば川上梟帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群がる夷の間に直往して火攻に逢ふ。劔でその火を薙返して夷を鑿にする。伊勢では、熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心でありませうか。と叔母命に泣いて語られたが、やがて涙をさめて夷を平げられる。死なうといふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勧められる。いろいろな積極的性質の面白く調和した、實に愉快

な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、みづから、我が心常には空よりも翔り行かんと思ふ。といはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて、威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。くまがしに白鳥。私はこの二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、足下を固める着實性と、高きに憧れる向上心とを表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、さうして、これが日本武尊といふ上代の代表的英傑に繋がつてゐることを面白く思ふ。日本の國民性が凝固つて、日本武尊となつたのではないかと思ふ。

次に奈良時代の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集とである。古事記は神代の古昔から推古天皇に至るまでの言傳ひを筆記したもの。萬葉集は奈良時代の歌人の作を中心とした上代の歌集である。さうして、二つともに昔の日本民族の純な面影を見るべ

き古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高天原に上られた時に、天照大神が命を待ちつけて詰問される一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大神聞きおどろかして、あがなせの命の上り來ますゆゑは、必ず善しき心ならじ、あが國を奪はんとおもほすにこそと詔り給ひて、即ち御髪を解き御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御かづらにも、左右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津のみすまるの珠を纏持たして、背には千入のゆぎを負ひ、比良には五百入のゆぎを附け、またいつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく、何故上り來ませると問ひ給ひき。」

大意は「須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大神御領の高

居丈高  
立ちはだかる

天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐しい權幕で上つてくるのは、きつと善意ではあるまい。察するに我が國を奪はんの下心であらうと仰せられて、早速凛々しい男裝に改めさせられ、髪を解いて角髪に結び、左右の御角髪にも、御かづらにも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入のゆぎを前後につけ、左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振立てて、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹴散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆ、しく、居丈高に立ちはだかつて、命の見えるを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。といふことである。土から掘出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大神の氣高い、勇ましい御姿が、雄

壯剛健な大文字の中に躍動してゐるやうに思はれる。我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづこのやうなものであつた。

——五十嵐力作文三十三講による——

一九 現代の文學 その一 千葉 龜雄

我が國現代文學の源流を求めようとすれば、どうしても明治二十一年から明治二十二年まで、に遡らねばならぬ。二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外、幸田露伴、廣津柳浪の諸作家が初めて文壇に現れ、各特殊な個性と清新な色彩のある處女作を發表し、眞の文學とはいかなるものか、また來るべき日本文學はいかなる形式の下にあらねばならぬかを當代に示したのが、實にこの時代だからである。而して、これ等作家の制作の傾向は、大づかみに寫實主義と呼ぶべきものであつた。殊に紅葉、露伴の初期の作物は、井原

(一) 評論家。東京日日新聞社顧問。山形縣に生れた。日本文學史に「山形縣の文學」の著がある。  
(二) 名は武太郎。島根縣の人。明治二十年。小説「口語體」の歴史を出した。明治四十三年。死。  
(三) 名は徳太郎。東京の人。明治中期の小説家として有名。多情多恨。金多。夜叉等。多くの著がある。明治三十六年。死。三十七年。  
(四) 名は直人。長崎の人。小説「變目傳」等。昭和四年。死。  
(五) 江戸時代の大家。小説家。大阪錦屋町の人。

(一) 名は雄藏。英文學者。戯曲家。文藝博士。安政六年。美濃國に生れた。戯曲「桐葉」の名。残の星。月夜。沙雞等の外。夜十卷がある。四

西鶴あたりの寫實小説から専ら手法や技巧を學んだものであつたが、精神に於ては何等の影響をもそれから受けず、却つて歐洲文學の感化を含んだ跡が著しかつた。一つは坪内逍遙が、明治十八年に「小説神髓」を著して、藝術の本質を始めて理論的に闡明し、それによつて、今までとは全く違つた文學に對する新しい觀念を時代に與へてゐた爲、また他の一つは、叙上の諸作家が歐洲文學に深い知識をもち、かの文學の精神を、我が國の文壇に移すことに忠實な信念をもつてゐたからでもある。例へば、二葉亭四迷の露文學に於ける、森鷗外の獨塊文學に於ける、當時に於ける歐洲文壇の名花の移植は、實に二家の功によるものが最も多い。なほその頃に於ける寫實主義の移植を初とし、その後今日に至るまで、我が國文壇の諸主流の流が、歐洲文壇のそれといつても起伏を同じくしてゐるのは、興味ある現象でなければならぬ。故に言葉を換へていへば、我が國文

(一)名は夏子。山梨縣の人。明治二十八年に始めて小説を出した。明治二十九年歿。二十五年。

學の潮流は、明治二十一二年代に於て、初めて世界文學の潮流に仲間入したものといつても、強ち誇張ではないであらう。さらばいふところの寫實主義とは何かとならば、それはあるが儘の相をたゞあるが儘に認め、その實象を力めて忠實に描き出さうとする態度である。だから題材を奇抜なものに求めず、反つて普通にありふれた社會の事實を取りあつかふ。例へば、紅葉が女性の種々相を描き、性情の自然な發展を寫すに力を集めた如きもそれである。かくして人間の心理や事物の様相を、できるだけ微細に描き出す必要が起ると共に、その必要に伴はない文章體の文章が次第に小説から離れ、言文一致體が主としてその頃から採用されて來たのは、もとより當然な趨勢でなければならぬ。

その間、明治女流作家の第一人者たる樋口一葉と、神祕小説の創意を拓いた泉鏡花とが現れたが、寫實主義は明治三十年代を止り

(一)名は爲造。明治三十年に蛇いちご。三十五年にはやり唄を出した。

(二)Ezra's Zola (西曆一八四〇年—一九〇二年) 作。

(三)英語ロマンスム (Romanticism) の宛字。

として下り阪になり、小杉天外が佛國十九世紀後半の自然派の主張を採入れ、新寫實主義を唱へるに至つて、我が國文壇は初めて自然主義時代の前期に入つた。天外のいふところは、人生そのものに善惡美醜の定まつた本質がない。小説はたゞあるが儘の實世間を、正直に丁寧な筆記すればよいといふのである。これを以前の寫實主義に比べれば、作者の主觀的な物の觀方を排して、たゞ嚴肅な技師として忠實に人生を映寫すべきことを唱へたのが違ふところである。これは専ら佛國のエミール・ゾラの傾向を學んだもので、永井荷風もまた「地獄の花」の一篇によつてそれに共鳴した。

思ふに歐洲に自然主義の發生した原因は、十九世紀後半に於ける自然科学の勃興による。即ち自然主義は、從來の浪漫主義理想主義に反抗したゞ實驗と分析とによつて、人生から一定の法則を引出さうとするものである。故にどこまでも客觀を尊ぶけれども、ゾ

ラの自然主義の主張には、まだ幾分の不徹底があり、その作物も、また幾分か浪漫的な氣分を加味したやうに、天外、荷風の作物も、同時にその弊のあることを免れなかつた。然して田山花袋、島崎藤村が出るに及んで、初めて自然主義の世紀が完成した。後期自然主義といふべきはこの時代である。花袋は現實暴露、或は露骨な描寫といふ信條により、専らモーパッサン<sup>(一)</sup>、フロールベル<sup>(二)</sup>の作風に法つた。即ちそのいふところによれば、人生は官能で經驗する外に、眞實なるものがない。しかも官能の前には、たゞ眞と偽とがあるだけで、善悪美醜といふものが有り得ないから、随つて世間がたとひどんなに醜惡と考へるものでも、それが眞實であるならば、冷靜にそれを描いて一向差支がないと。この主張は、藝術は必ず美を描くべきものだといふ既成の審美觀念を、根本から打碎いたもので、爲に自然主義といへば、必ず醜惡な人生相ばかりを寫すものだといふ常識から

(一)Maupassant  
(西曆一八五〇年—一八九三年)  
(二)Flaubert  
(西曆一八二〇年—一八八〇年)  
共にフランスの自然主義小説家

(一)名は誠也。明治九年新潟縣に生まれた。論文集、自然主義の著がある。  
(二)名は瀧太郎。島根縣の人。早稲田大學教授。近代文學の研究はその論文集、大正十七年歿、年四十八。  
(三)名は末雄。明治四年金澤市に生まれた。  
(四)名は忠夫。明治十二年岡山縣に生まれた。  
(五)名は美衛。詩人、小説家、批評家。兵庫縣人。大正十三年歿、年四十三。

の批難を受けたのは、怪しむに足りない。然し、當時熱心に自然主義を支持し強調した批評家に、長谷川天溪、島村抱月、その他の人々があり、また徳田秋聲<sup>(三)</sup>、正宗白鳥、國木田獨步、岩野泡鳴等のこの派の有力な諸作家が、各特色に豊かな制作を盛んに提出するやうになつて、自然主義の精彩ある展開は、殆どその頂點に達した。たゞ運命を人生に於ける不可抗力であるとし、人生のいかなる努力も悉く無効だと見る運命主義の信仰だけは、獨り秋聲、白鳥、獨歩のみにあつて、花袋、藤村の曾て示さなかつた自然主義の一面であつたが、かく初から人生の努力を否定し、反抗の無力を肯定するが故に、彼等の作物はすべて絶望的、虚無的であり、光を缺き、感激を失ひ、苦澁にして灰白な色彩に満ちた。

たゞ一人この滔々たる大勢の外に超逸し、最後まで自分の個性を護り通して、異彩ある作物を多産した作家に夏目漱石がある。漱

冲澹

石の才能は多角多様で、内容によつて様式を自由に變化してゆく爲に、容易に一つの主義をもつて彼を掩ふことが出来ない。たゞ彼はいかなる傾向を擇ぶにしても、悉く自然主義のゆき方と違ひ、或は正反した。恐らく彼の最も優れた傾向は、英國派心理小説の脈絡をひいた作物にあるであらうが、何にせよ、その明色と、倫理的意識と、東洋趣味的の冲澹とは、相俟つて自然主義の暗色から救はれようと欲する讀者に、多大な慰安を與へる力が籠つてゐたことは争はれない。

### 二〇 現代の文學 その二

自然主義の衰潮は、ちやうど大正初期に於て著しく目立つて來た。この時、恰も歐洲に於ても、自然主義は末期に迫つた。そして人生の些事や、機械的な運命觀のみに停滯してゐる自然主義に反抗し

(一)文學博士。名は辰夫。京都府の文人。大正十四年歿。四十四。

(二)Edgar Allan Poe. 十九世紀のアメリカの詩人、小説家、その短篇小説集の神秘小説の物語といふ。  
(三)Charles Baudelaire. 十九世紀のフランスの作家。悪の華。人工的樂園。散文小詩等の著がある。  
(四)雜誌「白樺」による一派の名。

て、人間の生命力を高調する現實主義の叫が到る所に聞えて來た。我が國でその現象を啓蒙的に説述した厨川白村の「近代文學十講」が、忽ち數十版を重ねたことによつても、當時の我が國讀書界が如何に新しい轉廻を文壇に望んでゐたかは、大凡知り得られるであらう。

けれども、たとひ我が國の自然主義全盛期にあつても、それと色の異なつた藝術が全く影を隠したといふわけではなかつた。例へば、谷崎潤一郎の如き日本人に珍しい異常感覺の追求によつて、新たに耽美派の一面を拓いた。彼は(一)ポールの神祕と、(二)ポードレルの頹廢味とを一つにした作家だといはれ、浪漫的色彩を最も明らかにした。けれども當時の文學思潮の傾向から見て、正面から自然主義に對抗し、また來るべき時代思潮の一面を暗示したものは、どうしても明治四十三年に於ける白樺派の擡頭に指を屈しなければな

- (一) 東京の人。武者小路實篤全集がある。
- (二) 明治十六年宮城縣に生まれた。
- (三) 東京の人。有島武郎全集がある。大正十四年四月十六日。
- (四) Dostyevsky. (西曆一八二一年—一八八二年)
- (五) Tagore. 印度の詩人。現集。生の實現。詩集。ギタンジャリ。著者。(西曆一八六一年—)
- (六) Romain Rolland. フランスの小説家。戯曲家。ジャン・クリストフの著者。(西曆一八六一年—)
- (七) Carpenter. イギリスの思想家。文明の原因と救済の著者。(西曆一八四四年—)

らない。白樺派は貴族の生れである武者小路實篤を盟主として、<sup>(一)</sup>賀直哉、<sup>(二)</sup>有島武郎等の學習院出身者を中心とし、人道愛と個性生命力との光明を高調しようとした新理想主義の一團である。人生に對する態度は、どこまでも肯定であり、積極であり、人類の將來は、一人類内部生命の飛躍によつて、限りない幸福にし向け得るといふのが彼等の信念である。蓋しかゝる藝術思想が生まれて來たのは、大正初期に於ける當時の哲學及び外國文學の感化によること<sup>(三)</sup>が最も多かつた。なぜならば明治末期から大正初期に於て著しい壓力を以て思潮界に歡迎されたものは、露のトルストイとドストエフスキーとの論策、主義、作物であり、更に印度のタゴール、佛のロマン・ローラン、英のカーペンター、ラッセル等の思潮が雜然として流れ入り、それを補ふに、獨のオイケン、佛のベルグソンの新哲學を以てした。要するにそれ等の思潮は、飽くまでも人間心靈の勝利を

- (八) Russel. イギリスの思想家。社會改造の原理。自由への道等の著者。(西曆一八七六年—)
- (九) Huaken. ドイツの哲學者。(西曆一八四六年—)
- (一〇) Parson. フランスの哲學者。創造的進化的著者。(西曆一八五九年—)
- (一一) Rehisur. 小説家。東京の人。昭和二年歿。年三十。
- (一二) 小説家。本名山内英夫。東京の人。

基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て、いかなる點からも、自然主義のこの上の生存を可能にするものではなかつた。新理想主義が一方に崛起すると共に、自然主義派に取つて代つた純藝術派の諸新人は、皆現實主義の使徒であつた。ここでもまた我が文壇は、そのゆき方が歐洲のそれに一致する。たゞ寫實主義も現實主義も、同じくリアリズムの名で呼ばれるけれども、その二つは全く違ふ。寫實主義は主觀を頭から抜きにして、専ら外面から物象を描かうとするのであるが、現實主義は觀照に於ては出來るだけ科學的の精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは、飽くまでも嚴肅な主觀に於てしようといふもので、我が國文壇に於ける現代大多數の作家は、多くか少くかこの主義に依りつゝ、あるものと見られる。菊池寛、<sup>(一)</sup>芥川龍之介が冷酷な諷刺によつて人間心理と現實人生相との矛盾を暴き出し、<sup>(二)</sup>里見淳、志賀直哉が精巧な技巧を以て如實



於ける實際的の啓蒙運動に源を發して、特にこの二三年間に於て、劇に對する興味が著しく我が全文壇の中心となり、戯曲の制作に筆を着ける作家が多くなつたことである。そしてこの趨勢は恐らく年一年と熱烈になつてゆくであらう。これもまた歐米文壇と傾向を等しくするもので、たゞ我が國にあつては、一はその趨勢が遅れて來た爲と、一は新脚本の上場が容易でないとの爲に、小説ほどの成長を見ることは出来ないが、既にこの方面にも幾人かの優秀な作家を出し、その作品には、我が國劇文學の先驅として、觀賞すべきものが決して少くない。

次に歐米文學の反譯の盛んな現狀も、また藝術界一般の要求を示すものでなければならぬ。印刷術の隆昌は、世界いかなる國の文學をも自由に移植せしめ、我が國民をして、坐らにして世界藝術圖書館の廻廊に立つ感あらしめる。我が文壇がその精を抜き粹を選んで、新しい日本文學を創造し得るのは、果していつの日であらうか。何にせよ、日本文學が世界藝術の一つの光となり、更にその光が反射して、我が國民の藝術的觀念を優れて高いものにするには、何よりも望ましいことである。

# 改新帝國讀本卷十終

昭和四年九月二十三日  
 昭和五年二月二十五日  
 昭和五年二月八日

改新帝國讀本 奧附

編者 芳賀矢一  
 訂補者 上田萬年  
 同 長谷川福平  
 發行者 東京市神田區通神保町九番地  
 合資 富山房  
 代表者 坂本嘉治馬

昭和五年 度定	昭和五年 臨時	昭和五年 臨時	昭和五年 臨時	昭和五年 臨時
卷一、二 各金七拾參錢	卷三、四 各金七拾錢	卷五、六 各金六拾七錢	卷七、八 各金六拾七錢	卷九 各金五拾七錢
卷十 各金五拾四錢				

定價	定價	定價	定價	定價
卷一、二 各金四拾五錢	卷三、四 各金四拾參錢	卷五、六 各金四拾壹錢	卷七、八 各金四拾壹錢	卷九 各金參拾五錢
卷十 各金參拾參錢				



發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資 富山房

電話九段一九三—一九五番  
 振替口座東京五〇一番

印刷所 富山房印刷部

